

鳥羽離宮跡発掘調査概報

昭和58年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

狩猟と採集に明け暮れた原始の時代以来、我が京都市域には、居住に適した平野部及び緩斜面が、約250平方キロメートルも所在し、その範囲に祖先の営為を示す遺跡が、平安京跡をはじめ約830箇所も含まれています。1平方キロメートル当たり3箇所強の遺跡が分布することになり、全国平均の2箇所強を上まわっております。したがって、宅地造成等の中規模以上の開発があれば、遺跡に遭遇する可能性が高くなります。

本市では、このような状況の中で、保存し得る遺跡は可能な限り保存し、保存し難い遺跡については調査を行い、その成果をできる限り、後世に伝えるよう努めております。

この概報は、昭和58年度国庫補助事業として実施した調査の結果をまとめたものであります。おわりに調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導、御協力をいただいた文化庁をはじめとする関係各位、市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和59年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う昭和58年度の鳥羽離宮跡発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は5ヶ所実施した。発掘調査次数は、第86次・第87次・第91次・第92次・第93次である。調査所在地は以下の通りである。
 - I 第86次 京都市伏見区竹田浄菩提院町50番地
 - II 第87次 京都市伏見区竹田小屋ノ内町71の1
 - III 第91次 京都市伏見区竹田浄菩提院町52の1
 - IV 第92次 京都市伏見区竹田小屋ノ内町46・47・48番地、竹田浄菩提院町42の1
 - V 第93次 京都市伏見区竹田小屋ノ内町79の1
- 3 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - I：鈴木久男 II，III-1・4，IV-1・4：前田義明 III-2・3，IV-2・3：堀内明博 V：中村敦 VI：岡田文男
- 4 写真は遺構の一部を除き牛嶋茂が担当した。
- 5 図中に使用した方位・座標は、新平面直角座標系(VI)による。
- 6 標高はT P(東京湾平均海面高度)を用いた。
- 7 文章及び断面図の土壌の色名は農林省農林水産技術会議事務局の監修による新版標準土色帖を用いた。
- 8 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方法に基き使用した。
- 9 本書に使用した地図は京都市都市計画局発行の2500分の1の地図(城南宮)を、京都市の承認を得て使用した。
- 10 調査及び本書作成にあたっては以下の人々が参加した。

青山均 栗林秀一 黒沢哲郎 桜井みどり 燧土勝徳 燧土智昭 寺田義晴 中川晃夫 長谷川行孝 林ひろみ 比屋根満 本田次男 山本雅和 阿野益太郎 奥田弥一郎 小山益一 林芳造 平塚良一 福井秀雄 山内芳高 山本伝次 北原四男 夏原三郎 藤野彦之 牟田嘉孝 山田米蔵 真喜志悦子
- 11 発掘調査にあたって、以下の各氏の協力および指導・助言をいただいた。記して深謝の意を表します。(五十音順・敬称略)

牛川喜幸 橋本清一 村岡正 安原啓示

本文目次

I	第86次発掘調査	1
	1 調査経過	1
	2 遺構	1
	3 遺物	3
	4 まとめ	3
II	第87次発掘調査	5
	1 調査経過	5
	2 遺構	5
	3 遺物	6
	4 まとめ	8
III	第91発掘調査	9
	1 調査経過	9
	2 遺構	10
	3 遺物	12
	4 まとめ	17
IV	第92次発掘調査	18
	1 調査経過	18
	2 遺構	19
	3 遺物	22
	4 まとめ	24

V	第93次発掘調査	25
1	調査経過	25
2	遺構・遺物	25
3	まとめ	26
VI	自然遺物	27
1	植物遺体	27
2	第86次調査	27
3	第91次調査	28

図版目次

- 図版 一 遺跡 航空写真 1 田中殿地区遠景(南西から) 2 東殿地区遠景(南西から)
- 図版 二 遺跡 第86次調査 1 園池全景(東から) 2 園池汀線(西から)
- 図版 三 遺跡 第86次調査 1 園池地業(東から) 2 地業細部(北東から)
- 図版 四 遺跡 第87次調査 1 調査区全景(中世・北から) 2 調査区南部(東から)
- 図版 五 遺跡 第91次調査 1 調査区全景(東から) 2 調査区東半部(南から)
- 図版 六 遺跡 第91次調査 1 SE31瓦積み井戸(西から) 2 SD10堀石組み(北から)
- 図版 七 遺跡 第92次調査 1 調査区全景(西から) 2 3トレンチSB2(東から)
- 図版 八 遺跡 第92次調査 1 1トレンチ園池(東から) 2 1トレンチ園池細部(北西から)
- 図版 九 遺跡 第92次調査 1 5トレンチ全景(東から) 2 5トレンチ園池(北西から)
- 図版 十 遺跡 第93次調査 1 調査前全景(南東から) 2 調査区全景(南から)
- 図版 十一 遺物 第87次調査 土師器皿：16 土師器杯：3・15 須恵器杯蓋：6 須恵器杯：
7・8・9・11・12 須恵器罍：19 須恵器短頸壺：13
- 図版 十二 遺物 第91次調査 軒丸瓦・軒平瓦
- 図版 十三 遺物 第92次調査 天蓋 瓔珞
- 図版 十四 遺物 第86次調査 第91次調査 植物遺体
- 図版 十五 遺跡 調査位置図
- 図版 十六 遺跡 第86次調査 1 園池実測図 2 地業実測図
- 図版 十七 遺跡 第91次調査 遺構実測図
- 図版 十八 遺跡 第92次調査 調査区配置図
- 図版 十九 遺跡 第92次調査 1トレンチ 5トレンチ園池実測図
- 図版 二十 遺物 第86次調査 軒瓦拓影・実測図
- 図版二十一 遺物 第87次調査 SX6(1~14) 第5層(15~20)出土土器実測図
- 図版二十二 遺物 第91次調査 軒瓦拓影・実測図

挿図目次

図1	調査位置図(1:5,000).....	1
図2	北壁断面実測図.....	2
図3	出土遺物実測図.....	3
図4	1, 東殿地区の航空写真(南東から) 2, 東殿地区の航空写真(東から).....	4
図5	遺構実測図.....	5
図6	南壁断面図.....	6
図7	調査区配置図.....	9
図8	S D10断面図.....	10
図9	S D10細部実測図.....	11
図10	S E31実測図.....	11
図11	出土遺物実測図.....	13
図12	出土遺物写真.....	16
図13	1トレンチ南壁断面図.....	18
図14	S B 2 平面図.....	19
図15	S B 2 断面図.....	20
図16	出土遺物実測図.....	23
図17	調査区配置図.....	25
図18	東壁断面図(1:40)	25
図19	第72・85・90次調査古墳時代遺構配置図.....	26

表目次

表1	木本分析結果.....	29
表2	草本分析結果.....	30

I 第86次発掘調査

1 調査経過

調査地は東殿南西部に位置し、第10次調査が西隣で、第11次調査はすぐ東側で実施されている。昭和47年度に実施した第10次調査では、拳大の石を突堤状に積みあげた遺構や庭園の一部を検出している。更に、昭和48年度に行なった第11次調査では、ゆるやかな曲線を描く池の汀線や庭石、遺水の跡と考えられる遺構を検出している。これらの庭園遺構は東殿に造営されたものの一部である。今回の調査地は、先の第10次調査地と第11次調査地の中間に位置しており従来発見されている一連の庭園遺構が検出される可能性が極めて高い。このため発掘調査に先だて、試掘調査を実施し洲浜の一部と思われる石敷面を検出した。このため調査は、試掘調査から発掘調査へと移行し継続して調査を実施した。調査地は現代の盛土層が厚く認められたため、重機を導入してこれを除去し調査を開始した。

2 遺構

調査の結果、検出した主な遺構は池の汀線・庭石・溝などである。その他、庭園構築に伴う地業を確認した。

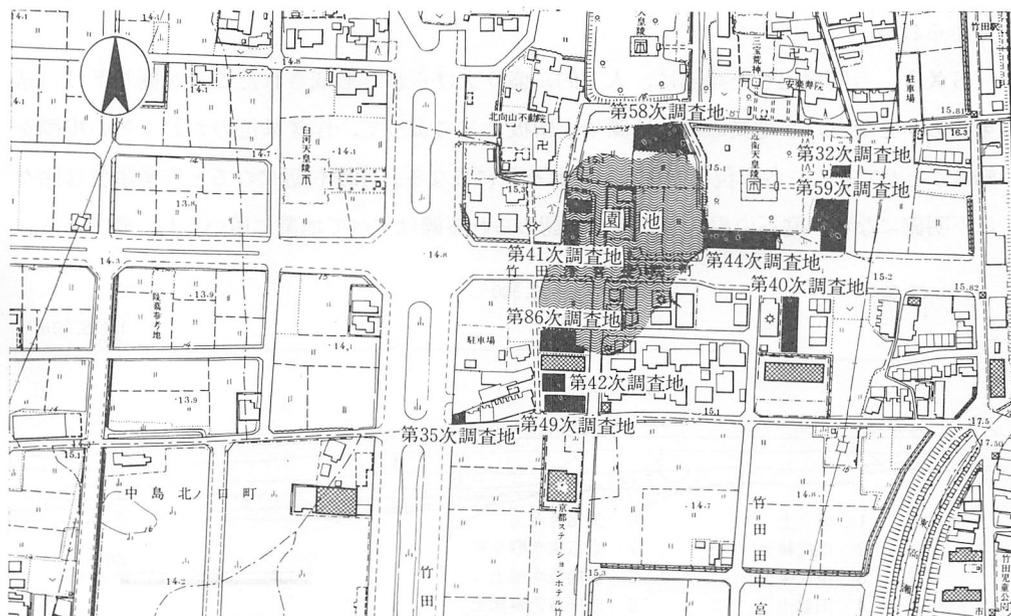


図1 調査位置図(1:5,000)

調査地の基本層位は、現代盛土層の下に耕土・床土が認められる。その下層は、近世の耕土と考えられる暗オリーブ灰色泥土層の堆積が認められる。更にその下に中世～近世にかけての耕土層(黒褐色泥土層)の堆積がある。この黒褐色泥土層は東側には厚く堆積しているが、西にゆくに従って徐々に薄くなる。この層より下は、池内堆積土となる。池内堆積土は上・下2層に大別される。

SG 1 池の肩はゆるやかな傾斜面で、水際には、拳大の玉石や割り石を幅80～100cmにわたって敷きつめ洲浜としている。この洲浜は場所によっては2面検出される部分がある。洲浜の周辺部には砂を敷きつめている。池の水際よりやや高い位置には庭石を据え付けている。現存していた庭石はチャートで、長さ100cm 高さ55cmを測る。この他に庭石の抜き取られた跡と考えられるものを2ヶ所で検出した。庭石の据え付けられている周辺には割り石がびっしりと敷きつめられていた。この石敷は地業の埋土としたものであるが、表面を庭の景観として利用している。池の推定水位は13m50cm前後である。池内の堆積土は黒褐色または暗灰黄色の腐植土層である。

SD 2 池の汀線に沿うように掘られた南北方向の素掘りの溝である。幅150cm深さ40cmを測る。溝内の堆積土はSG 1に認められたものと同一の腐植土層が認められ、園地とこの溝が同時期に機能していたと思われる。この溝は、池の水を外へ流し出していたものと考えられる。

SX 3 今回検出した陸部は、人工的に盛り上げられて形成されたことが掘り下げの結果明らかとなった。地業の単位は礫や土留板などによって、作業単位のおおよその規模を知ることができる。各単位内の埋土はそれぞれに異なる。水際付近になると作業単位は徐々に不明確になる。庭石の周辺部や陸部に認められる礫はすべて地業に用いられた礫である。

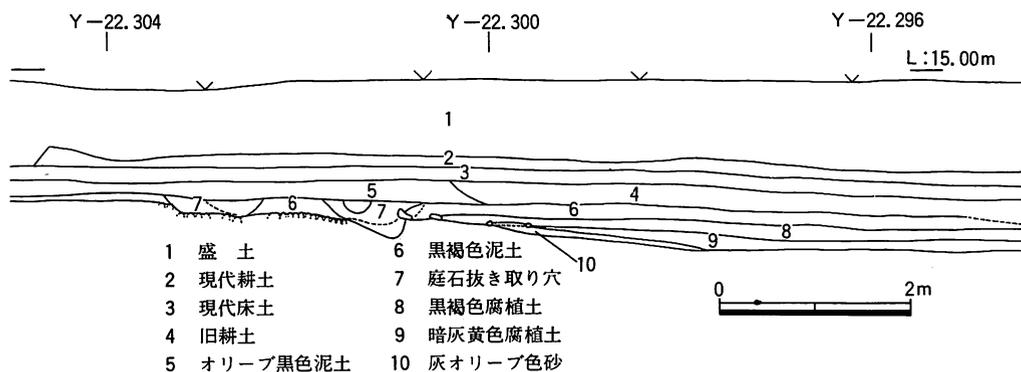


図2 北壁断面実測図

3 遺物

遺物は、池の水際や池底より土師器・瓦器・軒丸瓦・軒平瓦などが出土している。土師器皿1・2は口径10cm、高さ2cmを測る小型の皿である。口縁部はやや外反する。口縁部はヨコ方向のナデ、底部外面は未調整。3・4は口径15cm、高さ3cm前後を測る大型の皿である。口縁部内外面ともヨコ方向のナデ、底部外面は未調整。瓦器碗5は口径14.5cm、高さ4.5cmを測る。体部外面のヘラミガキはほとんど施さない。体部内面は荒いヘラミガキを施す。底部外面には低い高台を付ける。6は口径14.7cm、高さ5.1cmを測る。体部外面にはやや荒いヘラミガキを施す。体部内面のヘラミガキは外面に比較し丁寧に施す。高台は断面台形の付け高台である。

軒丸瓦1～3は、いずれも三巴であり巴の断面は半円形をしめす。焼成はいずれも良好である。1～3は東海系のもと考えられる。4は類例より複弁六弁蓮華文と考えられる。焼成はやや軟質である。軒平瓦5・6は、東海系の瓦で、瓦当中央に扇面形をした中心飾を配する。左右の唐草文は支葉が伸びず先端部分のみ大きく巻き込む。焼成はいずれも良好である。7は河内系の軒平瓦である。瓦当中央には雲文状の中心飾を配する。左右に反転する唐草はやや強く巻き込む。平瓦部凸面は縄叩きを施す。

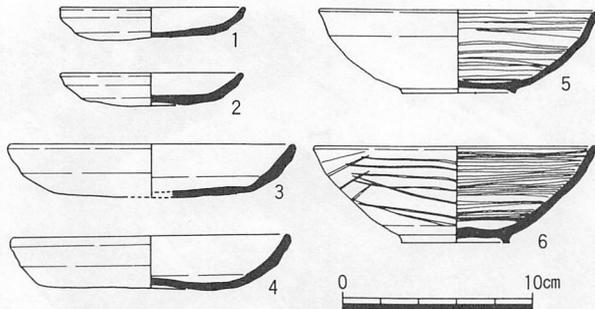


図3 出土遺物実測図

4 まとめ

今回の調査によって東殿に造営された園池の南半部はほぼ明らかになった。園池は、池の肩がゆるやかに傾斜し水際には拳大の礫を敷いている。水際よりやや高い位置に庭石を点々と配している。池の肩部及び陸部全体が人工的に盛り上げて形成されたものであることが一部明らかになった。この地業は田中殿などで検出されているものと異なったものである。ただし、このような地業は周囲の調査では検出されておらず、今後の調査に期待したい。



図4 1, 東殿地区の航空写真(南東から)



図4 2, 東殿地区の航空写真(東から)

II 第 87 次 調 査

1 調査経過

調査地は田中殿の東部に位置し、建物跡が検出された第2次調査地の南方100m、建物跡と園池が良好に遺存していた第79次調査地の東方60mの地点である。

当該地はこれまで水田であったが、倉庫を建設することになり、調査の対象となった。当初試掘調査を行ない、包含層と流路を確認したために発掘調査を実施する運びとなった。調査はL字形の調査区を設定し、耕土及び床土層は重機によって除去した。調査区の東半部は流路にあたり砂礫層が続いていたため、流路は肩部のみを検出することにし西側の遺物包含層が残っている部分を掘り下げることにした。そのため無遺物層まで調査を行なった面積は狭小なものとなった。

調査の結果鳥羽離宮期に相当する遺構は明確なものがなく、奈良時代以降の自然流路と奈良時代前期の土器溜め及び包含層が検出された。

2 遺構

調査区の基本的層序は、表面より第1層耕土15cm、第2層にぶい黄褐色泥砂25cm、第3層褐色泥砂25cm、第4層黄褐色砂泥40cm、第5層にぶい褐色砂泥15cm、第6層にぶい黄橙色砂泥5cm、第7層褐色砂泥、第8層にぶい褐色泥砂、第9層灰褐色砂泥、第10層灰オリブ色砂礫の順に続きこれより下は無遺物層の砂礫である。田中殿地区の発掘調査例では、鳥羽離宮廃絶以降水田化され、耕作土が何層も認められるが、当該地では現

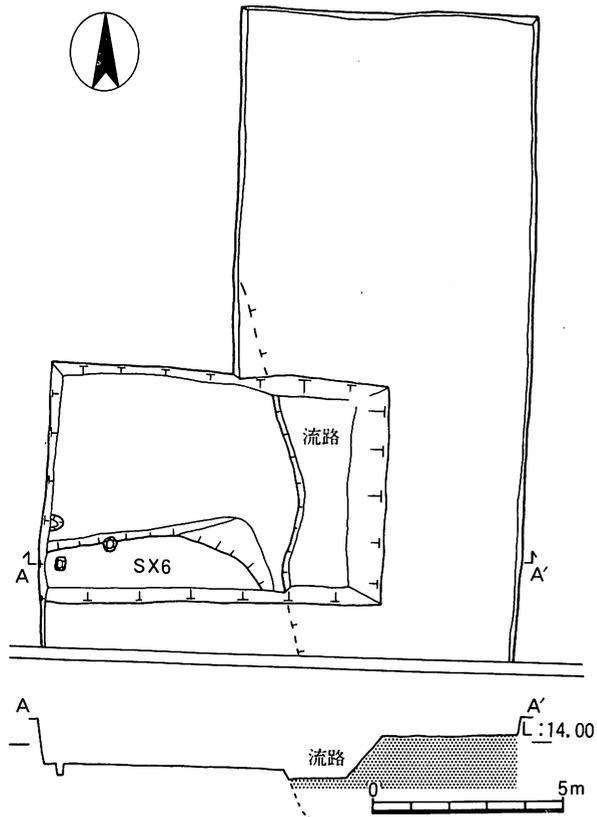


図5 遺構実測図

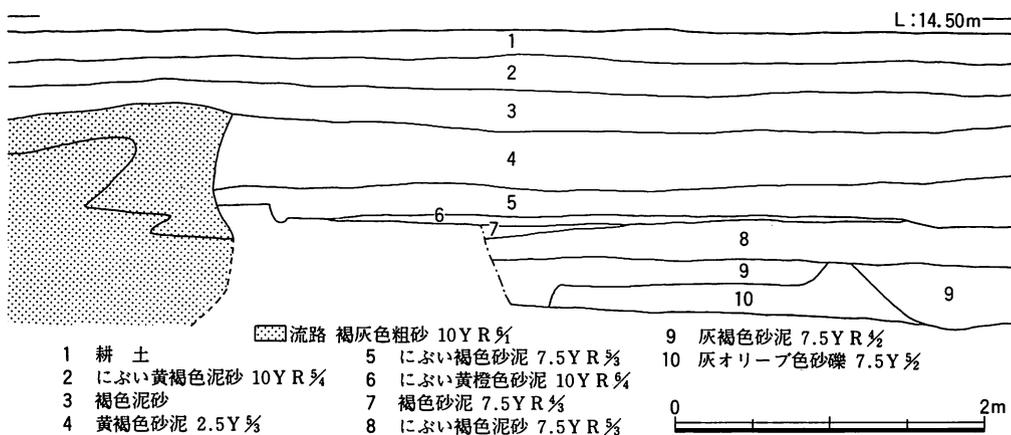


図6 南壁断面図

耕作土以外に水田の痕跡は認められない。第3層の上面で不定形の土壌群が検出され、遺物が小片ばかりで時期が限定し難いが中世と思われる。自然流路は第4層を切り込み成立している。第4層と第5層には奈良時代の遺物を包含しており、第5層の上面で、土器溜め(SX6)が検出された。第7層から第10層までは、少量の古墳時代前期の遺物が出土している。地山面は平坦ではなく、起伏が認められる。

検出遺構は自然流路、土器溜め、土壌群等である。

流路は調査地を北から南へ向って流れ、粗砂や砂礫が堆積している。したがって流れは相当速かったと思われる。この流路は南東へ200m程のところを試掘調査の時に見つかっており、北西から南東の方向である。今回の調査では、西肩部を検出したが、東側は調査区外まで広がり、川幅は6m以上を測る。深さは調査中の湧水が激しく、底部まで調査できず、1.5m以上である。流路の埋土には遺物が殆んど含まれず、時期を確定し難いが、層位的関係で奈良時代から中世の間に入る。

SX6(土器溜め)は調査区の南西隅で検出され東西6m、南北1.5mの範囲で比高差10cmの高まりがありその上面に土器類が集中して出土した。南側は調査区外へ延びている。

土壌群は図示していないが、第3層の上面で検出されたものと第7層の上面で検出されたものがあり、いずれも不定形で浅く性格が不明なものである。後者は、20~30cm間隔で並んで検出されている。

3 遺物

出土した遺物は整理箱で3箱と少ないがSX6と第5層より奈良時代前期の土器類が出土しており、以下その説明を行なう。

SX6出土土器

土師器(図版十一、二十一)

土師器には杯A、蓋、高杯、甕がある。

杯A(2, 3) 法量により2種に分かれる。(2:口径14.0cm, 器高3.0cm), (3:口径18.6cm, 器高5.0cm) いずれも口縁端部を内側に巻き込み、口縁部外面を横にナデ底部外面はヘラケズリを行なう。器面が摩滅しているため、外面のミガキは不明である。2は内面に左下りの放射状暗文を、3は右下りの放射状暗文をもつ。胎土は精良で茶褐色を呈する。

杯蓋(1) 平らな頂部で、なだらかに弯曲し、宝珠状のつまみをもつ。端部は肥厚し丸くおわる。外面はケズリの後ヘラミガキを行なう。胎土は精良で茶褐色を呈する。

高杯(4) 脚柱部をヘラで削り面取りを行なう。断面は14角形である。内面にはしぼり目があり、ヘラで横に削る。脚裾部の外面はミガキを行ない、端部は丸い。杯部は欠損しており不明である。胎土は精良で茶褐色を呈する。

甕(5) 長胴形の体部に外反する口縁部がつく。口縁端部は平坦で上方へ肥厚する。体部外面と口縁部内面にハケメをつける。体部内面はオサエのみ。口径27.8cm。胎土は荒く黄灰色を呈する。

須恵器(図版十一, 二十一)

須恵器には杯A、杯B、杯蓋、短頸壺、壺がある。

杯A(9~12) 法量により2種に分かれる。(12:口径14.0cm, 器高4.7cm), (9~11:口径11.6~11.8cm, 器高3.3~4.0cm) 9と11・12は口縁部がやや外反するが、10はまっすぐ上方にのびる。底部はいずれもヘラ切りの痕跡を残す。胎土は混入物少なく、焼成は良好である。色調は灰白色および青灰色である。

杯B(7, 8) いずれも底部外面にヘラ切りの痕跡を残し、外方へ開く高台がつく。底部と口縁部の境は丸みをおびる。7は口径15.0cm, 器高3.8cm。8は口径16.2cm, 器高4.2cmを測る。色調は7が灰白色, 8が青灰色を呈する。胎土焼成は杯Aと同様である。

杯蓋(6) 平たい頂部で下方にのびる端部をもち、つまみがつく。頂部外面はロクロを用いヘラで削る。この蓋はつまみが欠け内面がなめらかなため、皿に転用している可能性がある。口径は15.5cmで色調は青灰色を呈する。外面には自然釉がかかる。

短頸壺(13) やや肩の張る丸い体部に短い口縁部がつく。口縁端部はまっすぐ上方にのびて丸くおわる。底部は平底である。体部の下半はロクロを用いヘラで削る。口径7.6cm, 器高6.6cm。色調は暗灰色を呈する。

壺(14) 体部の上方を欠くがラップ状に開く口頸部がつくと思われる。外方へ開く高台は端部がへこむ。体部下半はロクロを用いヘラ削りを行なう。色調は灰白色を呈する。

第5層出土土器

土師器(図版十一, 二十一)

土師器には杯B, 皿, 甕がある。

杯B(15) 口縁端部は内側にかかるく巻き込み, 底部に外方へふんばる高台がつく。内面に2段の放射状暗文がつくが, 底部内面は摩滅し螺旋状暗文は不明。口径14.0cm, 器高4.0cm。胎土は精良で茶褐色を呈する。

皿(16) 口縁部は内弯し端部を内側に巻き込む。内面には左下りの放射状暗文をつけ, 底部外面はヘラ削りを行なう。口径21.6cm, 器高3.2cm。胎土は精良で茶褐色を呈する。

甕(17, 18) いずれも丸い体部に外反する口縁部がつく。17は体部外面に縦方向, 口縁部内面に横方向のハケメがつく。体部内面はオサエとナデを行なう。18は摩滅がひどく調整は不明。17は口径14.6cm, 色調淡灰黄色。18は口径13.6cm, 色調橙褐色。

須恵器(図版十一, 二十一)

須恵器には甗と壺がある。

甗(19) 平たい底部, 肩の張った体部に直立する頸部がつく。口縁部は欠損し不明。肩部に稜がありその上方に1条の沈線がめぐる。肩部から斜め下に向けて直径1.6cmの穴を穿つ。体部下半はロクロによるヘラ削り。色調は淡灰色を呈する。

壺(20) 丸い体部で平底の壺。頸部から上は欠損しているため不明。肩部に沈線と波状文がつく。体部下半はロクロを用いヘラ削りを行なう。色調は灰白色を呈する。

墨書土器

第4層より墨書土器が1点出土している。土師器の皿と思われる破片の口縁部外面に墨書したものである。2文字が認められるが, 字が薄れており判読し難い。

4 まとめ

今回の調査地はこれまで池と推定されていた地点であったが, そのような痕跡は認められず, 第79次調査で検出されている池は当該地より南へ展開すると考えられる。平安時代の遺構は認められなかったが, 下層で奈良時代前期の一括遺物が出土した。これまでの鳥羽離宮の調査では, 少量の土器類が出土したことはあるが, 遺構は明確ではなかった。今回の調査によって今後当該地周辺に奈良時代の遺構が発見される可能性が出てきた。調査区の東側を南流する自然流路は時期・川幅・流路の方向など不明な点が多くこれからの課題である。埋土をみると流れの速さを物語っており旧鴨川の氾濫による支流と考えられる。

III 第 91 次 調 査

1 調査経過

調査地は白河天皇陵の北東部に位置し水田として利用されていたところである。近辺の発掘調査をみると、当該地に東接して道路幅50mで南北に通る区画整理道路予定地内(第21次調査；第54次調査；第46次調査)や北方の東西道路(第55次調査)の調査がある。第21, 54, 46次調査では東殿の遺構とみられる建物跡・井戸・土壇(土器溜め)・溝等が検出され、第55次調査では、南側が池部になる庭石を配した汀線が見つかっている。そして昭和55年に宮内庁書陵部が行なった成菩提院陵駐車場整備工事区域の事前調査で、御陵の東側を南北に走る溝状遺構が検出されている。

当初試掘調査ということで、幅3mのH形のトレンチを設定し、耕土と床土層は重機によって排除した。調査区の東半部に凝灰岩の破片が散布している個所が認められ、建物跡が予想されたため東半分を拡張することにした。西半部では堀が見つかったが、調査後建

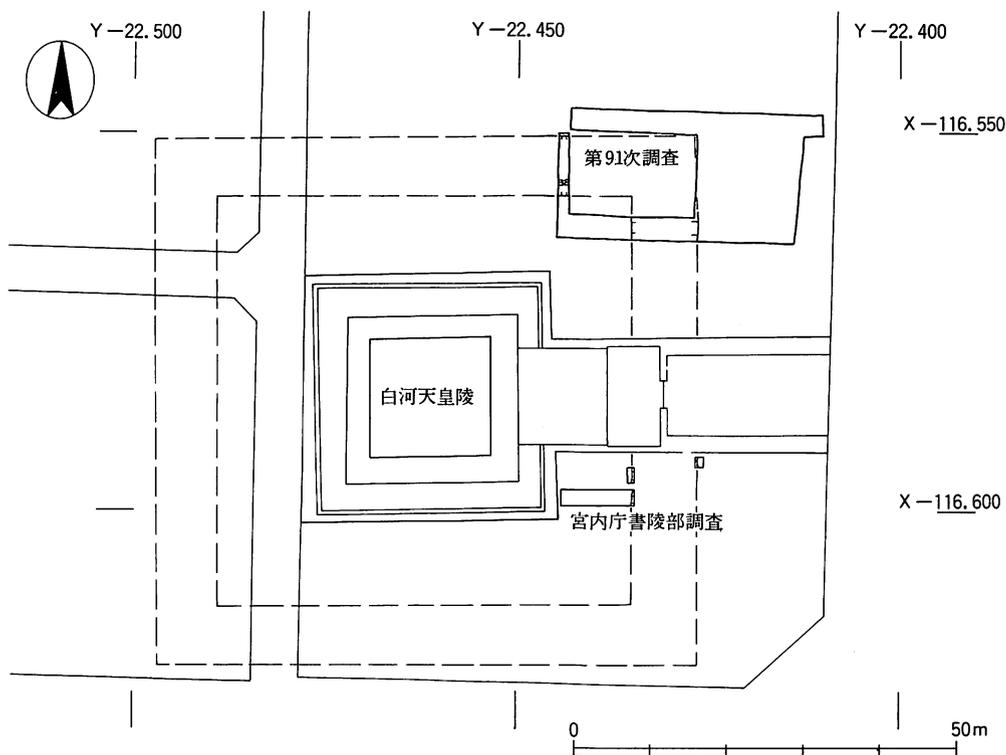


図 7 調査区配置図

築される建物の基礎が浅く、遺構を破壊することはないということで、西端に幅1.5mの細いトレンチを設けたのみである。

調査の結果は平安時代後期に作られたと思われる逆L字形に曲がる堀，そして室町時代の瓦積み井戸や土壇・ピット・溝が検出された。

2 遺構

基本層序

調査地は、白河天皇陵の北、標高15.4m前後の平坦な沖積地に位置している。調査地の基本土層は、まず厚さ25cmの近・現代の耕作土層があり、その下には厚さ10cmの暗灰黄色泥砂(2.5Y $\frac{5}{2}$)の近世の整地層がある。次いで厚さ35cmの灰色粘土層(5Y $\frac{5}{1}$)で、今調査において検出した平安時代から近世初頭までの遺構群はこの上面から掘り込まれていた。この層より下は厚さ40cm以上のオリーブ灰色粘土層(10Y $\frac{4}{2}$)が堆積し、層中から古墳時代の土器が少量出土した。

遺構の概要

調査区内で検出した遺構は、平安時代から近世初頭まで及ぶ。しかしこれらの遺構群は鎌倉時代後半から室町時代前半に属するものは認められず、この空白の時期をはさんで前後2群に分けられる。

まず、平安時代後半から鎌倉時代の遺構群のうち最も顕著な遺構として調査区西部で直角に折れ曲がる堀状遺構がある。これ以外は調査区東部で小規模な土壇、溝などがあるのにすぎない。次いで室町時代後半から近世初頭にかけての遺構群については、調査区東南部の瓦積み井戸、東西小溝、土壇などで顕著な遺構は認められなかった。なお、調査区西部の堀状遺構は安土桃山時代頃まで存続していたと考えられる。

平安時代後半から鎌倉時代の遺構

この時期の遺構としては、堀状遺構1条、溝1条、土壇7基等がある。

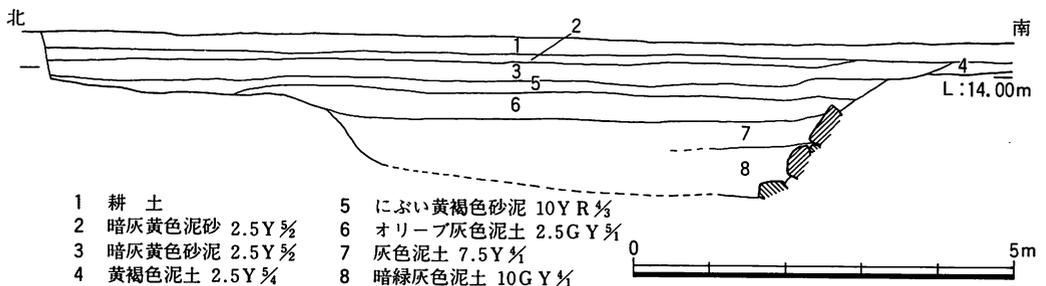


図8 SD 10断面図

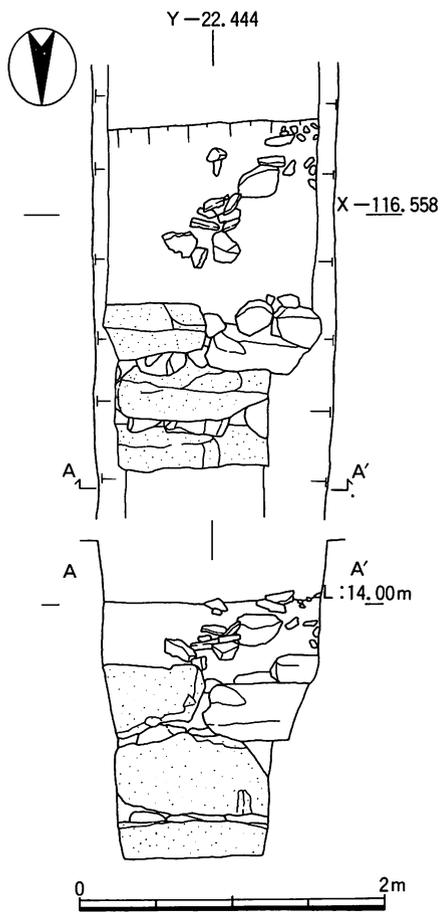


図9 S D 10 細部実測図

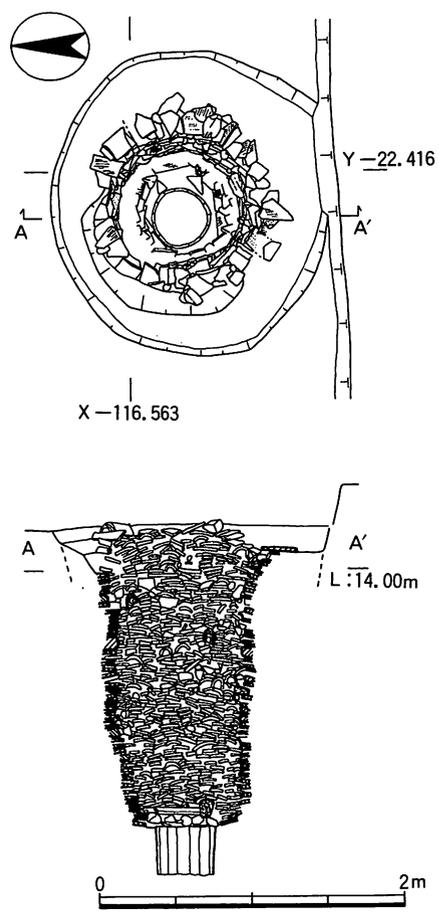


図10 S E 31 実測図

S D 10 調査区西部で検出した堀状遺構である。遺構の一部を確認したにすぎないが、調査区西部中央付近で東西方向から南にほぼ直角に折れ曲がっていると考えられる。遺構の幅は8.5m～8.7m、深さは1.6mで、底部は中央部がやや窪んでいる。堀の南肩部に長辺1m以上の自然石を三段に積み、石の間には20cm～30cmの礫を補填している。西肩部では直接積んだ状態は認められなかったが、自然石が散乱していたことから、この部分にも積みまわれていたと考えられる。堀状遺構の堆積は、四層に大別でき、上から第1層がにぶい黄色砂泥(10Y R 1/3)が厚さ20cmほど堆積する。第2層はオリブ灰色泥土(2.5G Y 1/1)で厚さ35cm堆積する。第3層は灰色泥土(7.5Y 1/1)で厚さ35cm堆積し、瓦などをやや多く含んでいる。第4層は、褐色腐植土(7.5Y R 1/3)が厚さ70cm前後と厚く堆積しており、自然木等が少量含まれていた。このうち第4層からは平安時代後半から鎌倉時代の土器、瓦が出土し、

第1層からは安土桃山時代の遺物が出土した。

S D 42 調査区の東北部で検出した東西方向の溝状遺構である。溝の方位はほぼN90° Eで、幅0.4m～0.6m、深さ25cmの断面逆台形を呈する。溝の堆積はにぶい褐色泥砂(7.5 Y R 5/4)の1層だけで凝灰岩の小破片が均一に含まれる他は少量の土器片が含まれるにすぎない。

S K 29・32 調査区東南隅で検出した土壌である。いずれも東西1.4m以上、深さ10cmの浅い土壌である。このうちS K 32はS E 31に切られた遺構で、底に凝灰岩の破片が非常に密に張り付いたような状態で出土したことから、凝灰岩列抜き取り痕とも考えられる。

S K 33 調査区東部中央で検出した遺構で東西4.6m、南北6.1m、深さ20cmの不定形の土壌である。瓦、土器、凝灰岩片等が出土した。

S K 44・47・48・49 調査区の東端で検出した径1m以上、深さ10cm～40cmの土壌群である。これらの遺構は、遺物はほとんど含まれていなく、窪み状を呈したものである。このうちS K 48からは径5cmほどの小礫が底部に密に分布しているのが認められた。

室町時代後半から近世初頭の遺構

この時期に属する遺構は、井戸1基、土壌、小溝、柱穴、落ち込み等がある。

S E 31 調査区東南隅で検出した井戸である。掘り形の平面は南北1.8m、東西2mのほぼ円形を呈し、掘り形の中央に径0.9mの瓦を小口積みにして円筒形に組んだ井戸枠がある。井戸枠に使用された瓦は、すべて平安時代後期のもので、軒瓦も含まれ、また瓦間には部分的に小礫が補填されている。深さは2mほどである。底部中央には、径40cm弱、深さ32cmの円筒形の桶を水溜りにしている。井戸の堆積は、三層に分かれ、上層がにぶい黄褐色砂泥、中層が暗褐色泥土、下層が灰色泥土となり、上層中に多量の瓦が認められた。

溝はいずれも幅20cm～40cm、深さ10cmほどの小規模なもので、調査区全域に認められ、ほとんど遺物は含まれない。一方、土壌は調査区の東部中央及び東北部にて認められ、幅1m以上の不定形を呈する浅いものが多く、少量の遺物を含むものが大部分である。

この他、調査区東部において平安時代中期の土器が出土した径20cmほどの小柱穴などがあるが、建物にまとまるようなものは認められなかった。

3 遺物

今調査において出土した遺物は瓦磚類、土器類、木製品などで整理箱34箱ほどである。これらの遺物の時期は古墳時代から近世初頭までに及び、堀状遺構、井戸からかなりの量の遺物が出土した。以下出土した遺物を瓦磚類、土器類、その他の順に述べることにする。

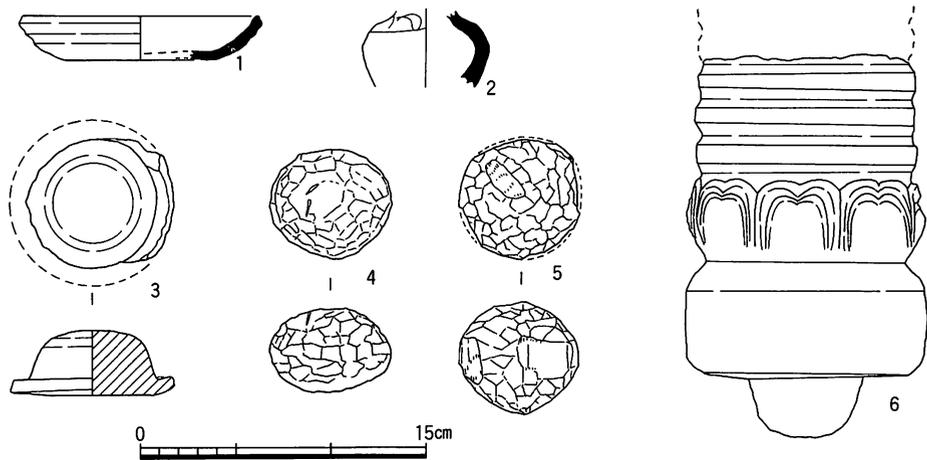


図 11 出土遺物実測図

瓦塼類

今回の調査で出土した瓦塼類は、すべて平安時代後半に属する軒丸瓦6点、軒平瓦10点の他丸瓦、平瓦などがある。これらの瓦塼類の出土状況は、建築遺構に直接伴ったものではなく、堀状遺構、井戸等に投棄された状態のものである。以下軒瓦を中心にその概要を述べる。

軒丸瓦(図版二十二)

三巴文軒丸瓦(1) S D10褐色腐植土層より出土し、完形である。右巻き込みの三巴を配し、巴の尾端部が接着して圏線をなす。瓦当裏面下半は指頭により押え、上半及び接合部はナデを行なう。胎土は、暗灰色を呈し砂粒を含む粗い胎土で、焼成は良好である。

複弁六弁蓮華文軒丸瓦(2) S E31より出土したもので、瓦当面上半部を残す。内区文様は複弁六弁の蓮華文で、花卉は一重の太い輪郭線で区切られる。子葉は、太くて短かく、中房の圏線に接している。中房は凸レンズ状を呈し一重の圏線がめぐる。この圏線の内側は傾斜する面をなす。瓦当裏面の調整は、指頭によりおさえたのち、ナデを行なう。また瓦当外周は横方向のナデを行なう。胎土は、灰色を呈し、密で須恵質である。この他、1点 S E31より、出土するが、花卉の子葉は(1)に較べて短い。播磨系軒丸瓦である。

複弁六弁蓮華文軒丸瓦(3) S E31より出土し、ほぼ完形に近いものである。内区文様は複弁六弁の蓮華文で、花卉は一重の細い輪郭線で区切られ、花卉間には間弁を配する。中房には1+6の大きな珠文を配し、一重の細い輪郭線によって中房を区切っている。内区と外区を分ける圏線は細く、外区には大きくやや扁平な珠文を12個配する。瓦当面には範傷

が認められる。瓦当裏面及び接合部は指頭によるナデを行ない、瓦当外周は横方向にナデる。丸瓦部凸面は縦方向にナデを行なう。胎土は淡黄灰色を呈し、砂粒を含むやや粗い胎土で軟質である。中央官衙系軒丸瓦である。

複弁八弁蓮華文軒丸瓦(4) SE31より出土し、瓦当面上半部を残す。内区文様は複弁八弁の蓮華文で、花卉は一重の細い輪郭線で区切られ、花卉上端は連なっている。中房は凸レンズ状を呈し、1+6の珠文を配し、中房は二重の細い輪郭線がめぐる。内区と外区を分ける圏線はなく、珠文をやや粗く配する。瓦当裏面の調整は不定方向のナデを行なう。胎土は、淡灰白色を呈するやや軟質のものである。

これ以外に、瓦当面がほとんど残存しなく、文様不明の軒丸瓦がSE31より出土する。

軒平瓦(図版二十二)

均整唐草文軒平瓦(5) SE31より出土。瓦当面左半部をとどめる。中央にC字下向形をおき、唐草文が左右に2転する。瓦当外周上部及び顎部から顎部下端にかけては、横方向のナデを行なう。胎土は、暗灰色を呈し、密な胎土で硬質である。播磨系軒平瓦である。

偏行唐草文軒平瓦(6) SK33より出土。瓦当面右半部をとどめる。唐草文は右から左へ反転進行し、蕨手はやや細い。瓦当外周上部は横方向にヘラケズリする。顎部から顎部下端は横方向にナデを行ない、平瓦部凸面は縦方向にナデる。いわゆる「半折れ曲げ」手法によるものである。胎土は灰色を呈し砂粒を多く含む粗いもので、硬質である。

偏行唐草文軒平瓦(7) SE31より出土し、ほぼ完形の軒平瓦である。唐草文は反転進行形で太い。外縁部に外区を設け、やや扁平な珠文を密に配する。瓦当外周上部及び顎部から顎部下端は横方向にナデを行なう。胎土は暗灰色を呈し、砂粒を含む粗い胎土で硬質なものが多い。この他SE31からもう2点、SK33から1点出土する。播磨系である。

均整唐草文軒平瓦(8) SE31より出土。瓦当面左半部をとどめる。中心には対向C字形を配し、唐草文は、中心飾りの下から四葉蕨手が左右に2転し、1転目の蕨手が1つ多い。瓦当外周上部及び瓦当裏面から顎部下端は横方向にナデを行なう。いわゆる「包み込み式」の軒平瓦で、鳥羽離宮跡発掘調査第79次に同範瓦が出土する。胎土は灰色を呈し、砂粒を含む硬質なものである。

唐草文軒平瓦(9) 柱穴より出土。瓦当面3分の1ほどを残す破片である。そのため内区文様の全体については不明であるが、唐草はかなり退化している。いわゆる「折り曲げ」手法によるものである。瓦当外周上部は横方向にヘラケズリする。顎部は横方向にナデるが、部分的に縄目叩きの痕跡をとどめる。胎土は淡灰色で密なもので、やや軟質である。

丸瓦・平瓦については説明を紙面上省略させていただくが、特記すべきものとしていわゆる「段瓦」と呼ばれる瓦群がやや多く出土した。

土器類

今調査で出土した土器類は、古墳時代から近世初頭にまで及ぶが、いずれも破片のものが多く、かつ多量に一括投棄されたように出土したものはほとんどない。しかし、量的に少ないながらもこれらの遺物を時期的に概観すると、室町時代から近世初頭までに属するものが最も多く、次いで平安時代から鎌倉時代前半のもので、古墳時代に属するものは、遺構検出面より下の堆積層から出土した数点にすぎない。

平安時代から鎌倉時代前半の土器

この時期の遺物は主にS D10第4層、S K33、S D42、S K48・49等から出土しており、このうちS D10第4層のものが量的に最も多い。

S D10第4層出土土器

この層から、土師器皿(器形から中型と小型のものに分類できる)、瓦器碗・壺・鍋・釜、須恵器碗・甕、常滑焼等の甕片などがあり、量的に土師器が過半数を占める。

土師器皿(1) 平らな底部にやや内弯気味に外方に開く口縁部からなり、口縁端部はつまみ上げて、上方にやや突出する。口縁部外面下半は指頭痕をとどめ、上半はいわゆる二段ナデの手法を用いたものである。胎土は褐色を呈し、やや密なもので硬質である。復原口径12.3cm、高さ2.3cm。

瓦器壺(2) 体部だけを残す破片である。体部外面肩部に1条の圏線がめぐり、この圏線と頸部間に連続輪状文を施す。体部内外面ともヨコナデする。胎土は淡灰色でやや密な胎土である。

S D42からは土師器皿・高杯、黒色土器碗、灰釉陶器碗・壺等の破片が出土し、S K48からは土師器皿、瓦器碗・皿、須恵器甕の破片が出土している。

室町時代後半から近世初頭の土器

主にS D10第1～3層、S D16・24等から出土しており、量的にはS D16が最も多い。

S D16からは土師器皿、瓦器碗・釜・鍋・甕、須恵器甕、瀬戸・美濃灰釉碗・皿・壺、備前焼・信楽焼などの鉢・甕、白磁、青磁、染付けが出土し、瓦器が過半数を占める。S D10第1～3層出土の土器は、その器種構成に関してはS D16に類似するが、その出土量では、土師器と瓦器の比率がほぼ同数とやや様相が異なる。S D24からは、土師器皿、青磁、染付け等で上述の2つの遺構の器種構成に較べてかなり単純なものである。

その他

今調査において瓦埴類、土器類以外には、土製品、木製品、石製品、鉄製品などがある。

土製品としては土塔(3)がある。これはS D10の第4層から出土しており、鏝部が4分の3ほど破損したものである。半球状の塔身に幅の狭い鏝を付けたものである。型おこしにより成形され、塔身外面には部分的に布目痕をとどめる。底部外面はナデを施す。塔身外面には濃緑色を呈する薄い不透明釉を施す。胎土は灰色を呈し、やや粗く、硬質である。口径8.7cm、高さ3.4cmの大型品である。

木製品としては、木球、加工木、板材などがある。木球(4、5)は、S D10第4層より出土している。その形態から楕円体を呈するものと球体を呈するものがある。木球の表面加工はノミにより成形されており、いずれも小さく面取りされている。最大径6.3cm、高さ4.4~6.9cm。

石製品としては宝塔片、砥石等がある。宝塔片(6)S D10石組抜き取り部分より出土した相輪部の一部分をとどめる破片である。請花部は反花の蓮華文を施し、覆鉢の下には露盤にはめこむための乳状突起が認められる。硬質の花崗岩製である。

鉄製品には、少量の鉄釘などがあるにすぎない。

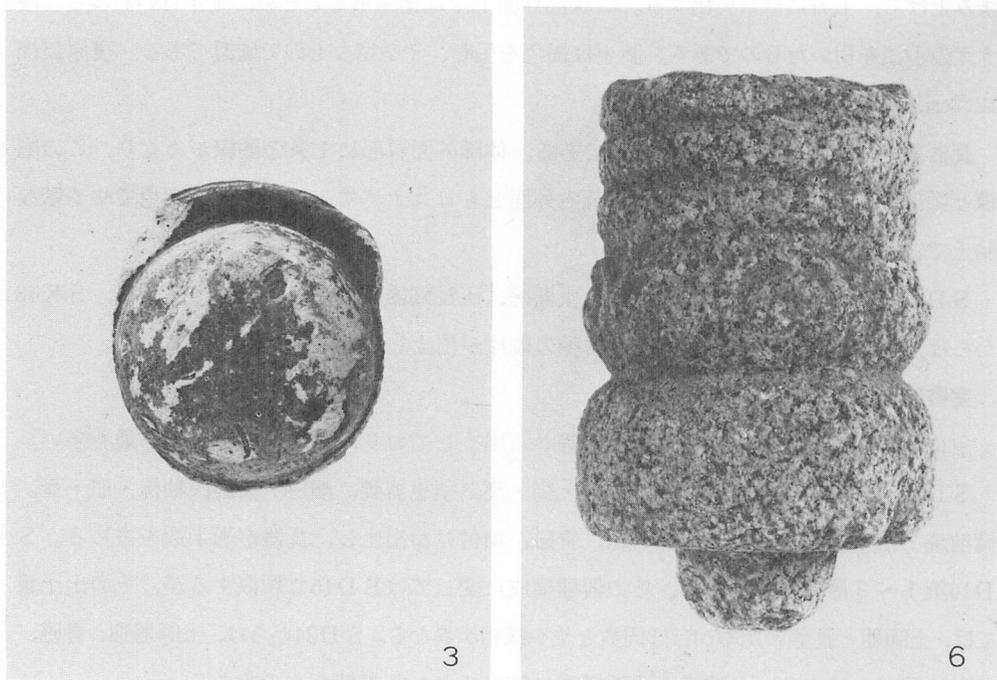


図12 出土遺物写真

4 まとめ

平安時代の遺構としては柱穴・溝・土壙が認められたが、室町時代以降の削平を受けたと思われ、遺存状態が悪い。しかし調査区内で折れ曲がる堀は、肩部に一辺1m以上の石を用い3段の石組みを施して良好に検出された。堀は、位置的にみて宮内庁で行なわれた事前調査で見つまっている溝状遺構の延長となり、白河天皇陵をとり囲む外堀と考えることができる。当該地ではその東北のコーナー部を検出したことになる。現在の白河天皇陵は一辺が約33mであるが、この外堀は築造当手を推定すると、内側で一辺約56mを測る陵墓であったことが予想される。このことは現在の鳥羽天皇陵と近衛天皇陵が一辺約65mであることをみて、白河天皇陵がやや小さいがそれほど大差なく造営されていたことが解る。堀の埋土をみると桃山時代に埋没したことが判明し、事情は不明であるが、現在の大きさに縮小されたのである。粉碎された凝灰石の破片が東半分で散布しており、近辺に建物遺構が検出される可能性は大であるが、当該地では確認することはできなかった。

室町時代の瓦積井戸(S E 31)に使用されている瓦はすべて、平安時代後期に属するものであり、鳥羽離宮東殿に用いられていた瓦を利用して造られたと考えられる。他の鳥羽離宮の発掘調査で検出されている室町時代の瓦積み井戸も、ほとんどが平安時代後期の瓦を使用していることが判明している。

今回の調査では、白河天皇陵の外堀を検出するなど重要な成果をあげることができたが、調査期間や掘削の深さなどで制約を受け、堀のコーナー部が未調査のまま残り、また堀の底部まで掘り下げることができず、十分な調査ができなかったことは惜しまれる。

IV 第 92 次 調 査

1 調査経過

鳥羽離宮田中殿跡にあたる現在の名神高速道路京都南インターチェンジ東側一帯は水田として利用されてきたのであるが、近年ホテルやモーターの進出が著しく、その都度発掘調査が実施され、鳥羽離宮跡の解明に役立ったが、遺跡の破壊ということにつながった。

発掘調査の成果をみると、田中殿と推定される建物群、築地、園池、道路など多数の遺構が検出され、非常に良好な状態で埋没していることが判明した。そしてその下層には、古墳時代の竪穴住居址や掘立柱建物が検出され、これまでまったく不明だった鳥羽離宮以前の遺跡も存在することが明らかになった。

これまでは開発に伴って調査が行なわれたのであるが、今回は先立って試掘調査によって遺跡の埋没状況を明らかにし、保存の対策を行なうことになった。

調査地は、第79次調査などで検出された鳥羽離宮田中殿跡の南側にあたり、その延長を調べる目的が今回の試掘調査である。第75次調査及び第79次調査で見つかった建物跡や園池は、南へ展開する様相を示しており、当該地によって田中殿の南限を知る手がかりが予想された。

調査対象地は2筆の水田であるが、当初幅5mで北端(1トレンチ, 3トレンチ)に47m, 西端(4トレンチ)に38m, 東側の水田のほぼ中央に幅6mの東西トレンチ(2トレンチ)を19mで設定した。耕土層と床土層は重機によって排除した。調査の結果、第79次調査の続きを検出し、園池の庭石の範囲を明らかにするため、さらに1トレンチと2トレンチの中央に東西トレンチ(5トレンチ)を設けた。

試掘調査のため検出された遺構は、必要な個所のみ掘り下げることとし、写真及び実測

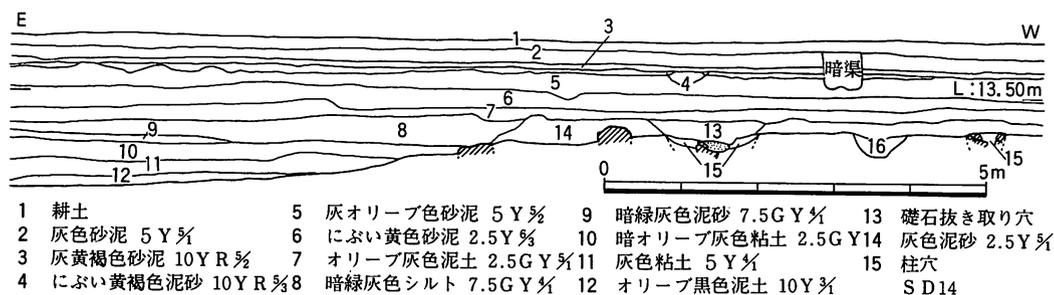


図 13 1 トレンチ南壁断面図



図 14 SB2 平面図

を行なった。そして基壇と庭石の上には
グランドシートと砂をサンドイッチ状
にしておい埋め戻しを行なった。

2 遺構

基本層序

調査地は、城南宮から北東の、標高
14.3m 前後の沖積地に位置し、第79次
調査の南にあたる。

調査地の基本土層は、まず厚さ20cm
の近・現代の耕作土層があり、その下は
厚さ10cmの灰オリブ色微砂(5 Y%),
厚さ20cmの灰色砂泥(5 Y%),厚さ10cm
の灰黄褐色砂泥(10 Y R%),厚さ10cm
の灰オリブ色砂泥(5 Y%)と近世の
遺物包含層がある。ここまでを一応機
械力により排土し、以下遺構検出を行
なったのち順次一層ごとに掘り下げて
いった。次いでに黄砂泥(2.5 Y
%)があり厚さ12cm~35cmで東及び南に
徐々に厚くなっている。またこの層ま
でSB2の基壇上面をおおっており、遺
物の取り上げなどのため便宜的に第一
層とした。この下はオリブ灰色泥土
(第2層, 2.5 G Y%)で厚さ15cm~20cm
とほぼ均一に堆積する層で室町時代の
遺物を含む。次いで暗灰黄色泥砂(第3
層, 2.5 Y%)で厚さ20cm前後の均一した
層である。鎌倉時代から室町時代の遺
物を含む。この上述した第1層から第
3層上面においては、南北方向の小規

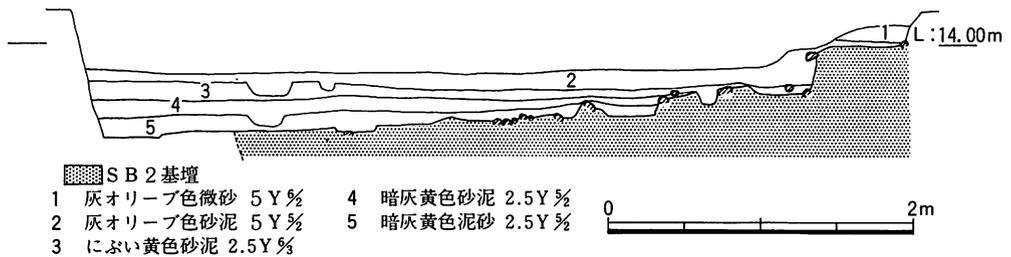


図 15 SB 2 断面図

模な溝を検出した以外顕著な遺構は認められなかった。第 4 層は明茶灰色泥砂でこの上面において鳥羽離宮期の遺構を検出した。この遺構面は調査区の西南部及び東端部が標高13m 強、西北部が13.5m で、西北部が一番高く、東南側に緩かに傾斜している。

遺構の概要

調査区内で検出した遺構は、平安時代後期から室町時代までに及び、掘り込み地業を伴なう基壇建物、礎石建物、園池等の鳥羽離宮期の最も顕著な遺構群を検出することができた。以下、これらの主要遺構について概略する。

S X 1 4 トレンチの中央やや南寄りの部分で検出した瓦溜めである。東西 4 m 以上、南北 4.5m の不定形を呈し、鳥羽離宮期の瓦が多量に含まれていた。

S B 2 3 トレンチと 4 トレンチの北端にて検出した掘り込み地業を伴なう基壇建物である。この建築遺構は第 75 次調査と第 79 次調査によって確認した S B 2 の南半分に相当し、今調査によって基壇南端及び東南隅を確認したことにより、ほぼその全容が明らかになった。その結果、掘り込み地業の規模は、東西約 30m、南北 24m であることが判明した。また、建物の南端桁行方向の礎石抜き取り痕跡を 5 個確認したことにより、桁行 5 間、梁行 4 間の建物に四面に縁の付く東西棟礎石建物で、桁行 7 間、梁行 6 間の規模をもち、桁行総長 24.9m、梁行総長 21m となる。柱間寸法の基準尺をほぼ 30cm 現尺とすると桁行は中央 3 間が 13 尺、両脇 1 間が 12 尺、縁が 10 尺となる。梁行は、身舎 2 間が 13 尺、両脇各々 1 間が 12 尺、縁が 10 尺となり、桁行 83 尺、梁行 70 尺となる。礎石は、今調査区内では、すべて抜き取られており、いずれも礎石据え付け痕跡を確認したにすぎない。しかし、据え付け痕跡の底部付近にいずれも花崗岩の風化剝落したものが認められたことから、礎石には花崗岩を使用

していたものと考えられる。礎石据え付け痕跡は径1 m～1.3mの円形を呈し、抜き取り痕跡で確認できた根石は、地業で使用している河原石よりも大きな径30cm～40cmのやや扁平な自然石を用いている。

基壇の築成に関しては第79次調査報告ですでに概説していることから省略して、ここでは今調査にて判明したことにふれたい。既存の調査でも基壇の高さは40cmほど認められたが、今調査でも50cmほど確認できた。しかしこれは縁束列より内側にだけ認められ、縁束礎石抜き取り痕跡部と明瞭にレベル差があり、第79次調査でも同様な現象が認められたことから、明らかに亀腹状を呈した基壇と考えられる。また桁行方向の縁束列から南へ1.5mほど(5尺)の所に縁束列と並行して幅約40cmほどの凝灰岩の小破片が均一に分布していることから基壇の外装施設として凝灰岩を使用していた可能性がある。

S B 15 1トレンチの西部で検出した東西1間以上、南北1間以上の礎石建物である。柱間寸法は南北1間2.4m(8尺)、東西1間3.6m(12尺)で礎石は残存していないが、礎石抜き取り痕跡を四つ検出した。礎石抜き取り痕跡は東側南北列が0.9m～1.3mの円形状を呈するのに対し、西側南北列は0.7m前後の円形を呈しており、西側南北列の方が規模が小さい。いずれの礎石抜き取り痕跡の底部にも花崗岩の風化剝落したものが認められたことから、礎石はS B 2同様花崗岩と考えられる。抜き取り痕跡で確認した根石は径30cm以上の自然石を使用している。

S G 9 1トレンチ、2トレンチ、5トレンチの各々東部で検出した園池で、調査区内では、南北約28mに渡って認められたものである。これは第79次調査で検出したS G 9の続きであり、その成果と合わせると南北58m以上にわたって確認されたことになる。池の水際は、調査区内ではその西側しか検出しなかったが、1トレンチから5トレンチにかけて大きく東側に突き出て、そのままほぼ南に下がるものと考えられる。水際の施設に関して、1トレンチから5トレンチにかけて大きく突き出す所には、チャートなどを庭石として集中的に配置しており、これより南側では顕著な施設は認められなかった。

池の基本堆積層は4層に分けられる。第1層が厚さ35cmの緑灰色シルト(7.5G Y₁)でこれは東へ徐々に薄くなる。第2層は暗オリーブ灰色粘土(2.5G Y₁)となり厚さ20cm～25cmである。第3層は、厚さ20cmの灰色粘土(5 Y₁)となり、第4層は厚さ15cmのオリーブ黒色泥土(10Y₁)の腐植土となる。この第4層から、鳥羽離宮期の瓦類とともに嬰珞が出土した。底には施設はなく、水際から東に緩やかに傾斜している。

S K 4・5・6・7 3トレンチの東部で認めた土壙状遺構群である。規模は径1 m以

上の楕円形もしくは不定形を呈する。深さはSK4・5が0.6m～0.7mと深いのに対し、他は0.2m前後と浅い。底にはSK5以外小さな窪みが数ヶ所認められ凹凸である。SK4とSK5の間に南北に2個庭石が据っているのが確認できたことから、これらの凹凸は庭石の根石とも考えられる。またSK4には埋土中に多量の小拳大の礫が認められた。

SX8 1トレンチSB15とSG9との間で確認された瓦溜めである。この瓦溜めには軒平瓦が仰向いた状態で3・4枚重なったものも認められた。また瓦溜めの北端・南端部に据った自然石が2・3個ならんで認められ、また瓦溜め中に同様な自然石が数個認められることから、この部分に南北方向の河原石列があったと考えられる。

SK10・11・12 4トレンチSX1の北方で検出した土壌状遺構である。いずれも径1.3m～1.5mの不定形を呈し、深さは30cm前後である。これらの土壌も底部には小さな窪みが数ヶ所認められた。なお遺構群のすぐ北側に庭石が1個確認できており、遺物の出土もほとんどないことなどから、これらの遺構は庭石の据え付け痕跡とも考えられる。

SX13 2トレンチの西端、5トレンチの西部で一部分確認した落ち込みで、南北15m以上の大規模なものである。深さは20cmと浅く底はほぼ平坦である。なお5トレンチのSX13の底部にはまばらに小礫が分布しているのが確認でき、また底部にも一部分小礫が張り付いたような状態も認められた。落ち込みの堆積層は、上層が厚さ10cmの灰色泥土(10Y $\frac{1}{2}$)で下層は厚さ10cm～20cmのオリーブ灰色泥土(10Y $\frac{1}{2}$)である。

SD14 1トレンチの西部で検出した南北溝である。幅は0.7m前後で、深さは0.25mほどの断面逆台形を呈する浅い溝である。この溝は第79次調査では未確認であり、かつ5トレンチでも認められず、性格は現在のところ不明である。

3 遺物

今調査により出土した遺物は、瓦埴類、土器類、金属製品などで整理箱31箱ある。これらの遺物を類別、時代別にみると平安時代後期の瓦類が全体のうちの圧倒的多数を占めている。土器類は破片のものが大部分で、時期別には室町時代から安土桃山時代までに属するものが過半数を占め、池、落ち込み、瓦溜め、土壌などから出土した。

瓦埴類

今調査で出土した瓦埴類は、すべて平安時代後期に属しており、その大部分は丸瓦・平瓦で、軒丸瓦は34点、軒平瓦は15点である。

軒瓦

軒丸瓦には、複弁六弁蓮花文軒丸瓦、三巴文軒丸瓦などがあり、複弁六弁蓮花文軒丸瓦

が数量的に過半数を占める。複弁六弁蓮花文軒丸瓦は、「鳥羽離宮跡発掘調査概報」昭和57年度の図版12の1～3と同型式のものである。三巴文軒丸瓦には、外区に珠文を配するものと配さないものがあり、前者の方が数量的に極めて少ない。

軒平瓦には、均整唐草文軒平瓦、三巴文軒平瓦などがあり均整唐草文軒平瓦が圧倒的多数を占める。この瓦は「鳥羽離宮跡発掘調査概報」昭和57年度図版14と同型式である。

土器類

今調査で出土した土器類は、平安時代から安土桃山時代にまで及ぶが、多量に一括投棄されて出土したものはない。これらの遺物のうち、数量的には室町時代から安土桃山時代のものが最も多く、かつ器種も豊富である。これに対し、平安時代後期から鎌倉時代に及ぶ時期の遺物は量的にも少なく、器種も限定されている。

平安時代後期から鎌倉時代の土器

主にSG9の底部付近から少量の土師器皿、瓦器碗などが出土するにすぎない。

瓦器碗(1) 1トレンチSG9の第3層から出土したほぼ完形のものである。平らな底に内弯気味に外方に開く口縁部からなり、口縁端部は丸くおわる。口縁端部内面にはわずかに沈線状の痕跡をとどめる。内底面にはやや粗い螺旋暗文が認められ、口縁部内面のミガキもやや粗い。口縁部外面にはミガキはなく、上半はヨコナデする。底部外面には低い台高台が付く。胎土は淡灰色で密なもので焼成は良好である。楠葉型。口径13.6cm、高さ4.4cm。

室町時代から安土桃山時代の遺物

この時代のものは、SG9第1層、包含層などから出土する。器種では、土師器皿、瓦器碗・釜・鍋、瀬戸・美濃の灰釉碗・天目釉碗・壺、備前焼・信楽焼などの鉢・甕、須恵器鉢・甕、青磁、染付けなどがある。

土製品

土製品としては土塔(2)がある。4トレンチSX1より出土する。鋳部がほとんど残存しない小型品で、型おこしにより成形される。塔身外面には淡黄緑色を呈するやや厚い不

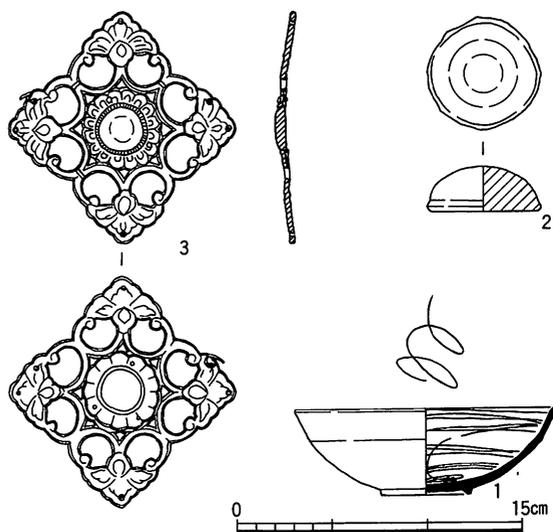


図16 出土遺物実測図

透明釉を施す。色調は淡橙色で、微砂粒を含む軟質の胎土である。残存径2.8cm。

金属製品

金属製品には、瓔珞、鉄釘がある。瓔珞(3)は1トレンチSG9東端部の第4層から出土した。一辺が9cmの正方形で厚さ3mmを測る。銅製で中央に16弁の蓮華文を配し、四隅につくの付く宝相華文を表裏共に透かし彫りしている。文様はタガネを用いて刻み、金メッキを施す。蓮華文の内側には直径2.3cm、厚さ0.5cmの中央がややふくらんだ円板状の鉛ガラスをはめ込んでいる。そして裏側から13弁の蓮華文を彫った銅板をあて、3本の鋸で止めている。四隅と左右のやや上方に1個ずつ計6個の1.5mm程度の穴が穿たれている。そしてその左隅の上方の穴に直径1mmの銅線が巻きついていて、金メッキは剥げ落ち、鉛ガラスは灰白色に変色していたが、これは二次的な火を受けた結果と考えられる。

4 まとめ

幅の狭いトレンチの調査ではあったが、第79次調査で検出された建物(SB2)と庭園遺構の延長を確認し、当初の予想どおりの成果をあげることができた。調査対象地の中央部は不明な点が多いが、南端付近で南へ傾斜し、池状になると思われるため、田中殿の南限と考えることができる。

SB2は東西7間×南北6間の東西棟であることが判明し、さらにその東側に池の汀に接して4個の柱跡を検出し建物(SB15)が存在することが明らかになった。SB15の北側の柱筋はSB2の桁行の側柱筋と一致し、計画的に配置されていたことがわかる。

庭石は池の汀線に第79次調査の南部と同様に荒磯風に組んだものと、前栽として配したものとがある。調査地の南半は汀の庭石は見られなくなり、小石を敷くというようなことも行なわれていない。SB2の東側や南側に配置された前栽の庭石の周囲に認められる土壌群は、庭石として据えられた石を後世に抜き取った痕跡とも考えられる。庭石は第79次調査で検出された石材としては、チャート、粘板岩、砂岩、花崗岩などバラエティーに富んでいたのに対し、当調査区ではチャートが主に用いられているのが特徴である。

今回出土した遺物の中で注目されるのは天蓋の瓔珞である。遺存状態も良好で流麗な文様に金メッキが施され、金剛心院かあるいは他の御堂に安置されている仏像をきらびやかに装飾していたものであろう。

鳥羽離宮跡の下層には古墳時代の遺跡が存在するのであるが、今回の調査では平安時代後期の遺構面より下層は調査していないため、以前の遺跡は確認していない。これらの不明な点、あるいは誤認している点は今後の当該地の本調査に譲りたい。

V 第 93 次 調 査

1 調査経過

今回の調査は、ホテル建設に先だち鳥羽離宮跡の遺構の有無を確認する調査である。調査地は、名神高速道路京都南インターチェンジの南東に隣接し、田中殿児童公園の西南40mに位置する。又、西に隣接して第76次・89次・90次調査が行なわれており、鳥羽離宮田中殿跡に比定されているところである。特に当敷地は、北大路跡を確認した第72次・85次調査区の東に隣接し、今回の調査では北大路側溝の検出が期待される場所であった。

調査は、トレンチを敷地中央に東西約4m、南北21m設定し、重機による掘削をGL-80cmまで行なった。そして、その後鳥羽離宮期の遺構面の検出を行ない、土壌(2)、溝(1)を確認した。北大路側溝及び鳥羽離宮期の建物等の遺構については、今回のトレンチでは検出できなかった。

2 遺構・遺物

遺構は、中世の溝1条、土壌2ヶ所検出した。又、トレンチ内北側で凝灰岩の小破片が少し認められたがその性格についてはあきらかにすることはできなかった。下層は土層堆積の確認調査にとどまった。その結果、灰褐色泥砂層(16cm)は、鳥羽離宮整地層、灰色泥砂層(20cm)は平安中期の遺構面を、暗褐色泥砂層(20cm)は古墳後期の遺構面を、褐灰色泥砂層(20cm)は古墳前期の遺構面に相当することが周辺の調査結果より判った。

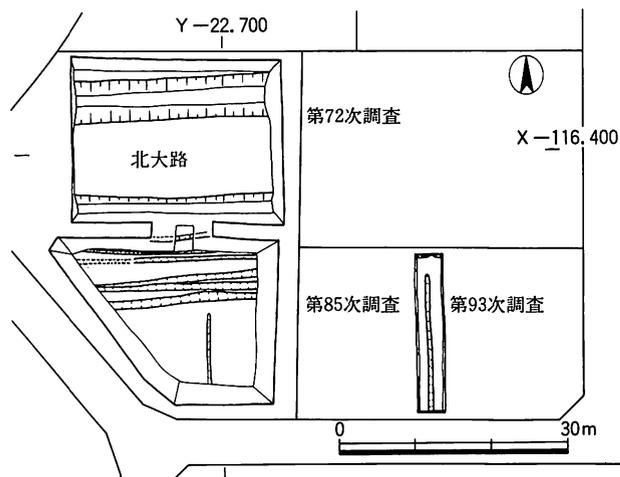
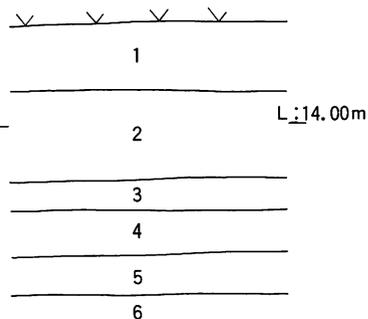


図 17 調査区配置図



- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 耕土・床土 | 2 黄灰色泥砂 2.5Y ½ |
| 3 灰褐色泥砂 7.5Y R ½ | 4 灰色泥砂 5Y ½ |
| 5 暗褐色泥砂 10Y R ¾ | 6 褐灰色泥砂 10Y R ¾ |

図 18 東壁断面図(1:40)

出土遺物は、整理箱1箱出土し、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、瓦、サヌカイト剥片などがある。大半は、平安時代後期から鎌倉時代後半のもので、弥生から古墳時代のものは数点出土しただけである。

3 まとめ

トレンチ内では北大路側溝、建物等の鳥羽離宮期の遺構は検出できなかったが、下層遺構についてはボーリングステッキによる土層堆積の確認調査により古墳時代の層位を発見することができた。なお図に示すように第72次・85次・90次調査地で古墳時代の溝・竪穴住居址、土墳墓群・90次調査では弥生時代の溝が発見されている。以上のことから、当敷地は、古墳時代の遺構が発見される可能性が高く今後の調査に期待がもたれる。

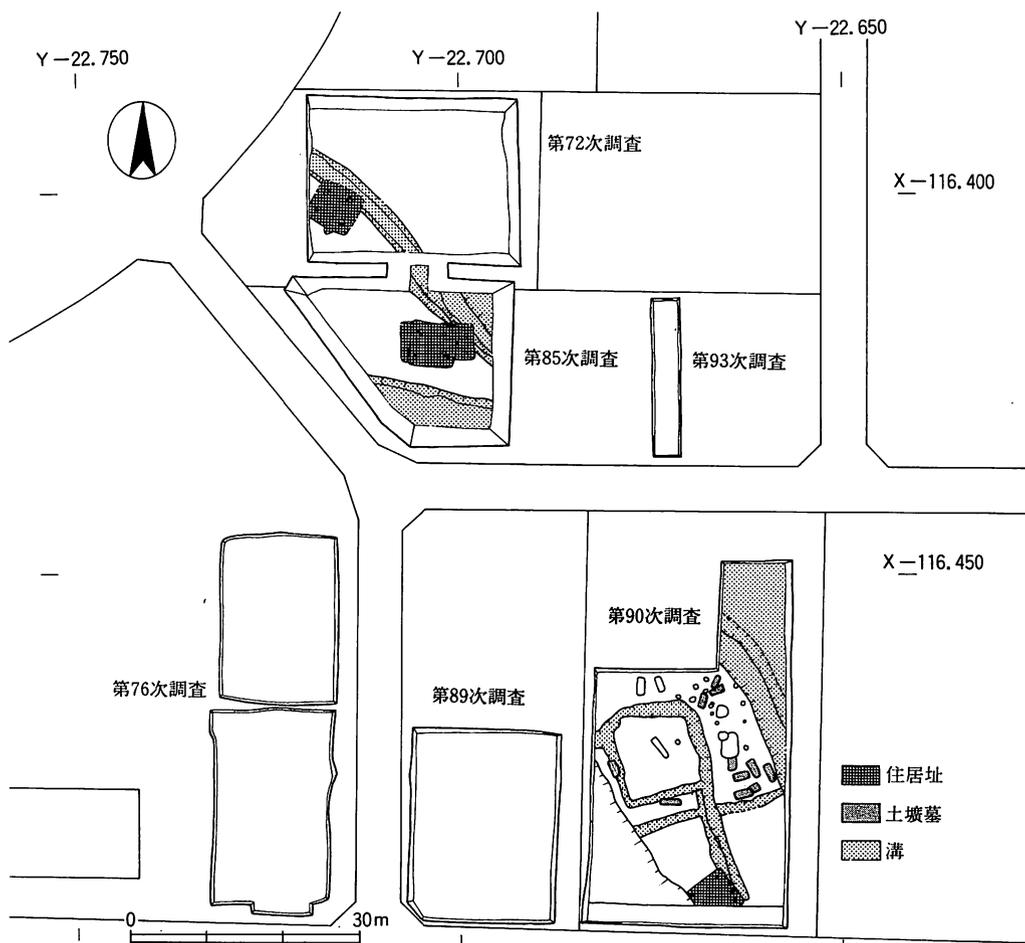


図19 第72・85・90次調査古墳時代遺構配置図

VI 自然遺物

1 植物遺体

鳥羽離宮の発掘調査では過去に推定東殿、田中殿、北殿、南殿の庭園遺構の一部が出土しており、各庭園の汀線や庭石の配置の様子などが次第に明らかになりつつある。それに対して庭園の構成要素として庭石に劣らず重要である樹木や草花などの植物などについては根株の残っていることが非常に稀であり、どのような種類の植物がどのあたりに植栽されていたのか判明した例はごく限られる。発掘調査が進み、建物や庭園遺構が明らかになる中で樹木や草花がどのように植栽されていたのか解明することは、作庭者の意図を知る上で意味があるばかりでなく、鳥羽離宮の個々の庭園を復原する過程でも必要なことである。樹木の根株の検出はこれまでの調査例からしてもあまり期待できないが、幸いなことに庭園に伴う池の堆積土中には木片や種実・葉などの植物遺体が多量に含まれることがある。この植物遺体は池のごく周辺に生育した母植物から落下してそのまま堆積したものである可能性が高く、植物遺体を採集し、分析することで池の周囲の植物についての知見が得られる可能性がある。植物遺体を分析試料とする場合、木片や種実などの大型のものや非常に微小な花粉を扱うことが考えられるが、①木本・草本とも多量の情報が得られること、②試料の分析法が容易であること、③種レベルでの同定が可能であることの条件を満たすものとして種実を扱うことにする。試料の採集法は埋土をすべて除去した池の検出面で汀線付近に沿って何ヶ所かで土壌を採取し、屋内で1mmメッシュの篩で水洗するのである。そして木本・草本とも種を同定し、計数を行ないその多少によって植物の種類、植栽された地点の特定を試みるわけである。現在のところ母植物と種子生産量の関係や種実の分散の状態についての把握など未解決の問題が多くあり、計数結果による種実の多少がそのまま植生を反映しているとは考えていないが、植物の構成によってある程度の環境評価は行なって良いだろうし、そのためには計数結果が意味を持つものと考えている。

昭和58年度は第86次調査及び第91次調査の植物遺体を分析した。

2 第86次調査

調査区内の遺構は推定東殿の池の汀線であることから、汀線付近の土壌を5ヶ所から採取した。採取地点は(X686, Y298), (X690, Y298), (X691, Y295), (X692, Y297), (X693.5, Y294.5)である。さらに比較の為汀線から離れた池の中央により近い所で堆積土の上層と下層の土壌を分析した。その結果木本8科9種、草本26科36種を得た。木本ではマ

ツ(二葉松), エノキ, カジノキ, サクラ, キイチゴ, サンショウ, センダン, カエデ, ブドウ属などがある。調査範囲がせまく, 特にどの樹種がどのあたりにあったといえる程の情報は得られなかったが, 以前の調査で東殿の池の周囲でマツ・サクラ・カエデの根株が確認されており, 同種の種実がわずかながらも確認できたことは周囲の樹木の様子を知る上で注目して良い。草本の種実は木本よりもずっと出土量が多く, カヤツリグサが特に多かった。その他にスベリヒユやカタバミなどの背丈の低い人里植物が多いので, 除草がよく行なわれていたようである。草本の中にはナス・ウリ・イネのように栽培植物もわずかにあるが, その他で意図して植栽したと思われるものはない。

3 第91次調査

調査区内の遺構は白河天皇陵の外堀であるという。堀の下層に堆積した腐植土層の土3 lを水洗し, 植物の種実を分析した。腐植土層は木片や落葉広葉樹の葉が堆積したもので, その中に木本や草本の種実が混っている。同定できたのは木本が5科6種, 草本が8科13種である。他に未同定の種実が数種類あるが, 形状から草本のものようである。木本で最も量が多いのはエノキとセンダンである。その他にムクノキ・カジノキ・サクラ・クサギがある。エノキには果実のままのものがあり, 母樹から落下してそのまま堆積した状態を示している。草本ではセリ・タガラシ・ミゾソバが非常に多いが種類は少ない。

堀の腐植土層は堆積状況から白河天皇陵の外縁部を構成していた樹木によってできたものと考えてよい。分析の結果では堀に堆積していた樹木の種実はすべて落葉広葉樹であり, サクラ・センダン・クサギなどの花木やエノキ・ムクノキなどの高木からなる。サクラは周知のように四月頃に花をつける。センダンは五月末頃に緑色の葉と良く調和した紫色の花をつける。クサギは八月末頃に白い花をつける。堆積物から推定する白河天皇陵の外縁部は以上のような樹木の構成からなる可能性が高いので, 春から夏にかけて季節ごとに花が咲き, 冬にはすっかり落葉してしまうといった景観を想像できる。

ちなみに現在の天皇陵には周囲にはウバメガシやアラカシの生垣をめぐらし, その内側に沿って30年生程のクロマツを植栽している。その内側には堀があり, 中央部にはクスノキ・タブノキなどの常緑広葉樹を植栽している。堀の下層の堆積物を分析した結果, 現在の白河天皇陵に植栽される樹木が過去の樹木の構成とは全く違うという印象を強くした。

図版(図)解説

1 ムクノキ(×4) 2 エノキ(×6) 3 カジノキ(×12) 4 サクラ(×6) 5 センダン(×2.6) 6 クサギ(×6) 7 タデ属(×12) 8 タデ属(×12) 9 ミゾソバ(×8) 10 ギシギシ(×8) 11 アカザ(×16) 12 スベリヒユ(×16) 13 ハコベ属(×16) 14 マツモ(×2.6) 15 タガラシ(×16) 16 キンポウゲ科(×12) 17 ヘビイチゴ属(×16) 18 カタバミ(×16) 19 セリ(×12) 20 セリ科(×12) 21 チドメグサ(×16) 22 シソ(×16) 23 ナス(×8) 24 タカサブロウ(×12) 25 ミクリ科(×6) 26 ヒルムシロ(×8) 27 オモダカ(×8) 28 ヘラオモダカ(×8) 29 イネ(×4) 30 イネ科(×16) 31 カヤツリグサ属(×16) 32 カヤツリグサ属(×16) 33 ホタルイ(×8) 34 イボクサ(×8) 35 ミズアオイ(×16) 36 コナギ(×16)

表1 木本分析結果

出土地点			第 86 次							第91次堀
			X- 116,686 Y- 22,298	X- 116,690 Y- 22,298	X- 116,691 Y- 22,295	X- 116,692 Y- 22,297	X-116, 693.5 Y- 22,294.5	池上層	池下層	
科	名	和名								
マ	ツ	マツ(二葉)	1			1		3	6	◎ R R
ニ	レ	エノキ		1					3	
ク	ワ	カジノキ		破片 2		1	破片 1		破片 1	◎
バ	ラ	サクラ		1			破片 2			
	〃	キイチゴ								
ミ	カン	サンショウ				2				
セ	ンダン	センダン					1			
カ	エデ	カエデ				1				
ブ	ドウ	ブドウ属								ムクノキ◎ クサギR

◎ 非常に多い ○ 多い R まれ 数字は個数を示す。

表2 草本分析結果

出土地点		第 86 次					池上層	池下層	第91次堀
科	和名	X-116,606 Y-22,298	X-116,690 Y-22,298	X-116,691 Y-22,295	X-116,692 Y-22,297	X-116,693.5 Y-22,294.5			
タ	テ		32		5	6		17	○
									○
ア	カ								○
ヒ	ユ	1	5		5	2			
ス	ベリヒユ	1	55		155	19			
ザ	クロソウ		3		8				
ナ	デシユ	1	12	1	17	9			
			1	1					
マ	ツモ							1	
キン	ポウゲ			17	7	2		272	◎
									○
バ	ラ				1			1	
マ	メ							破片	
カ	タバミ	1	14		7	7			
ト	ウダイグサ				6	4			
ヒ	シ		4	1	20	7			
ア	リノトウグサ		1			1			
セ	リ							2	◎
			4		3	3		1	
シ	ソ		1		4	2			R
ナ	ス	1	3	1	7	1			
			1						
ウ	リ	1	1		2・ $\frac{1}{2}$	1			
キ	ク	2	4	5	9	7			R
ミ	クリ				1			13	
ヒ	ルムシロ							2	
オ	モダカ		1		1	2		14	R
								1	
イ	ネ		2	2	1	2			
					ムギ2	2		5	
カ	ヤツリグサ	5	165	89	272	51			
			8		15				
		1			3	1		31	
ツ	ユクサ	2		1	2	5			○
ミ	ズアオイ		2		1			23	
			8		7			26	

◎ 非常に多い ○ 多い R まれ 数字は個数を示す。

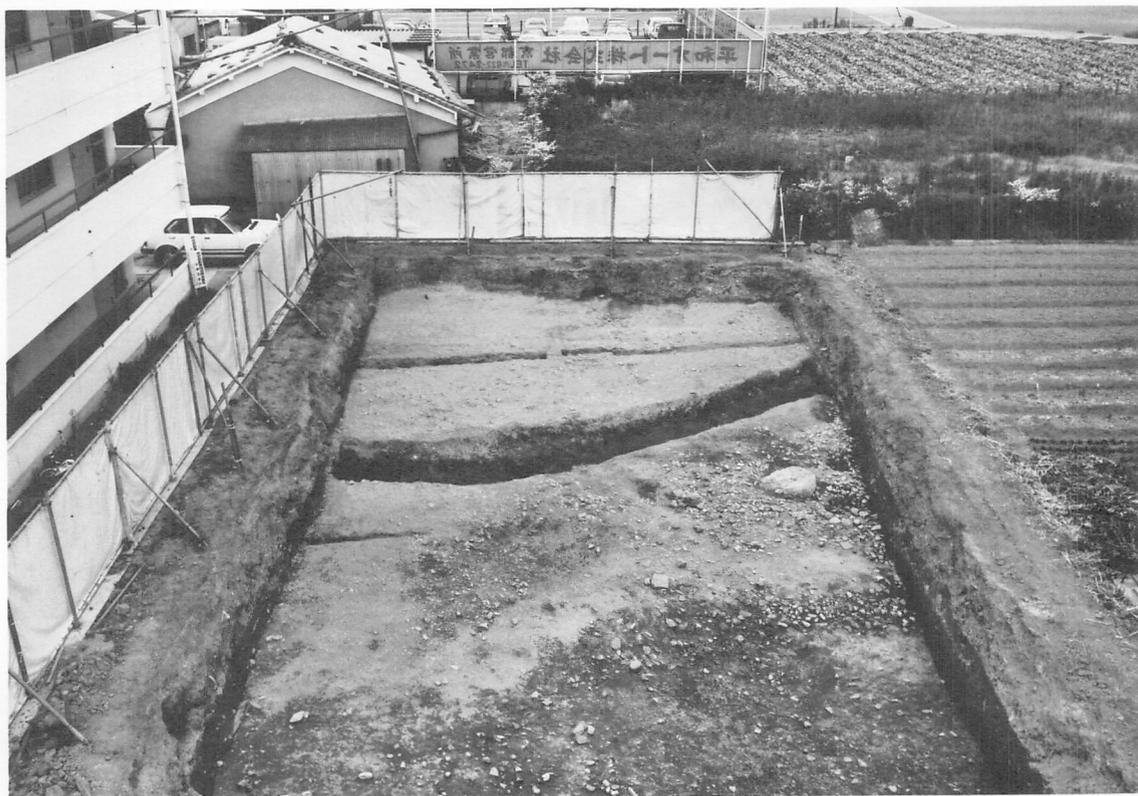
圖 版



1 田中殿地区遠景（南西から）



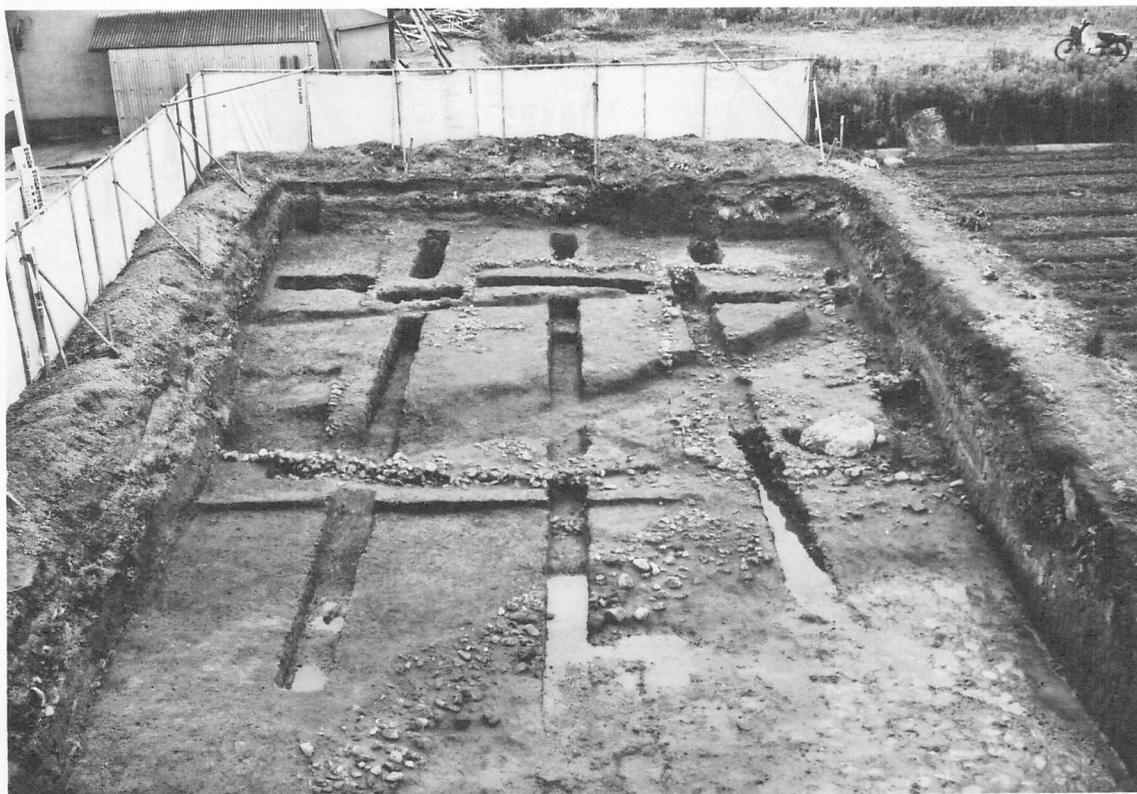
2 東殿地区遠景（南西から）



1 園池全景（東から）



2 園池汀線（西から）



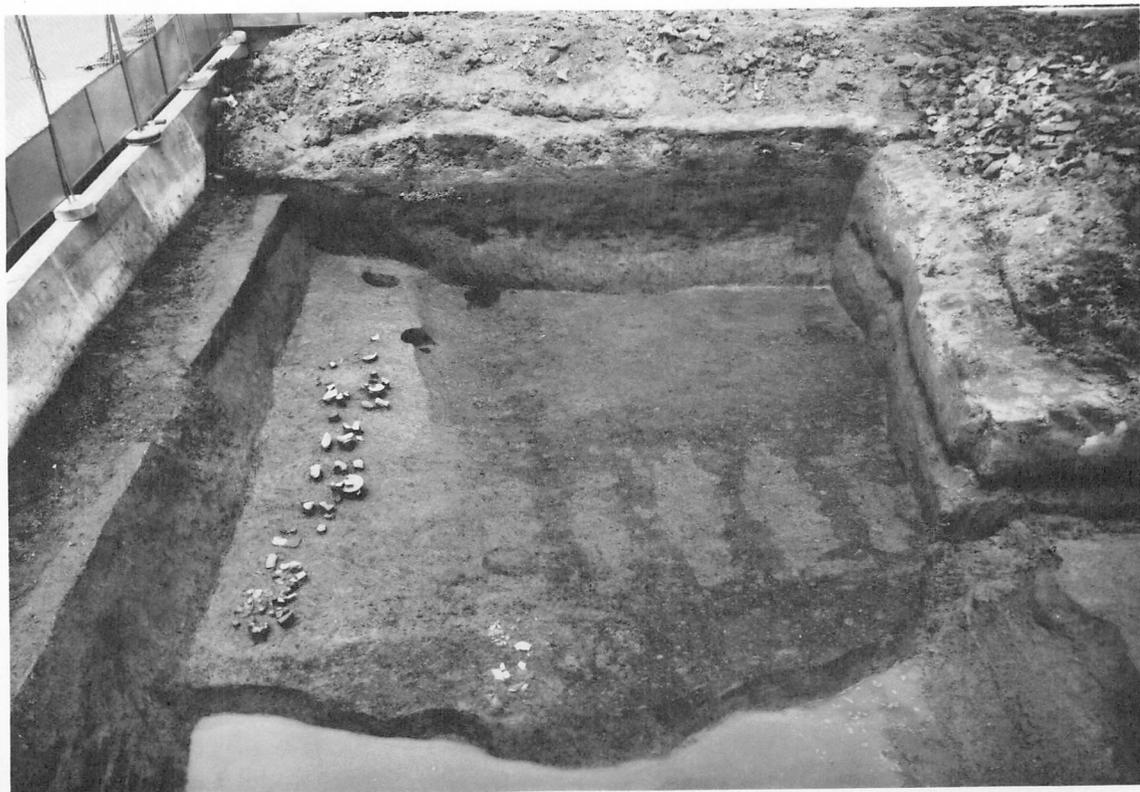
1 園池地業（東から）



2 地業細部（北東から）



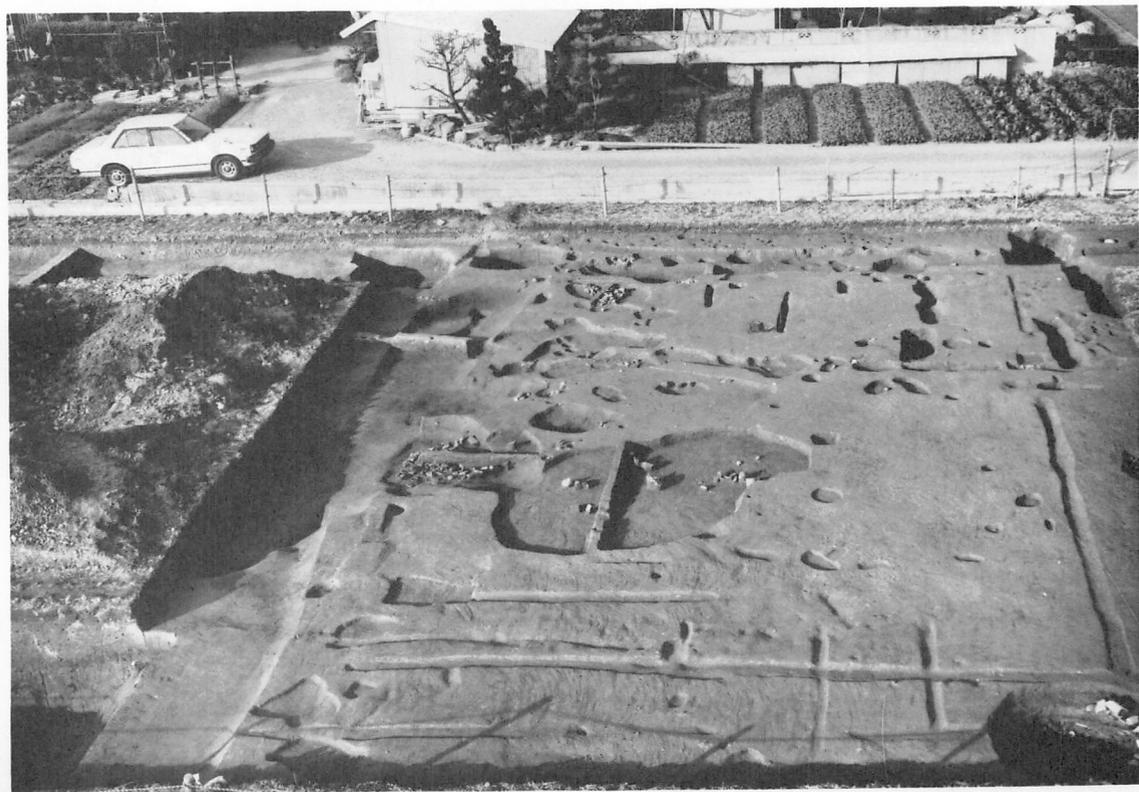
1 調査区全景（中世・北から）



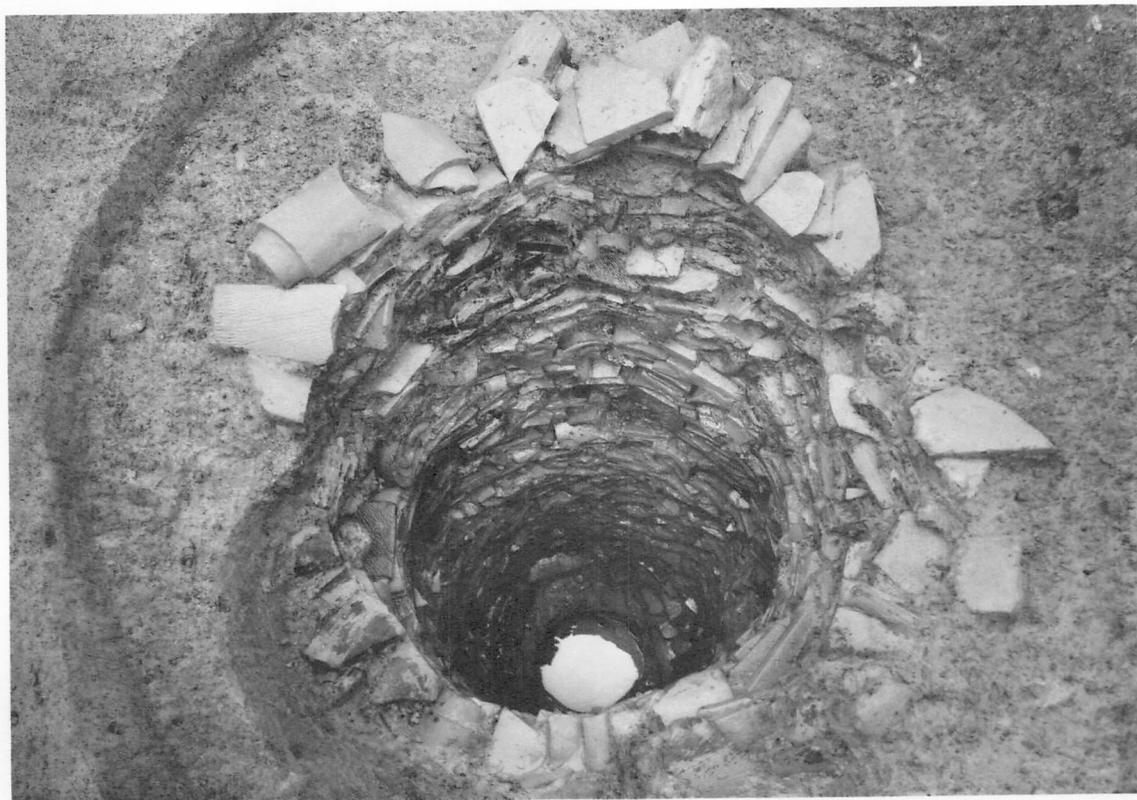
2 調査区南部（東から）



1 調査区全景 (東から)



2 調査区東半部 (南から)



1 SE31瓦積み井戸（西から）



2 SD10堀石組み（北から）



1 調査区全景 (西から)



2 3トレンチSB2 (東から)



1 1トレンチ園池（東から）



2 1トレンチ園池細部（北西から）



1 5トレンチ全景（東から）



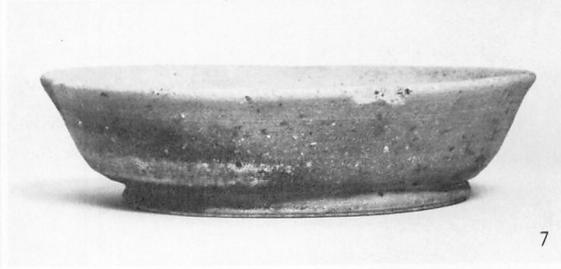
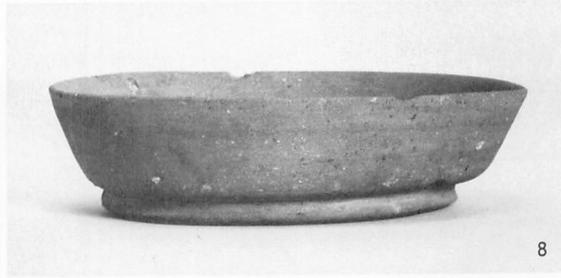
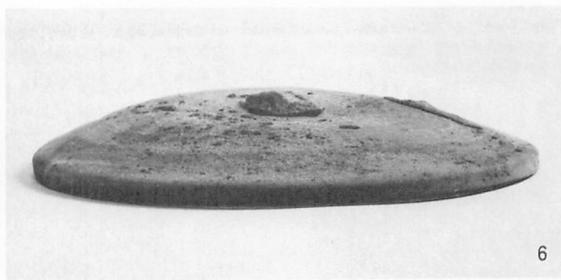
2 5トレンチ園池（北西から）



1 調査前全景（南東から）



2 調査区全景（南から）



土師器皿：16，土師器杯：3・15，須惠器杯蓋：6，須惠器杯：7・8・9・11・12，
須惠器罍：19，須惠器短頸壺：13



1



2



3



4



5



6

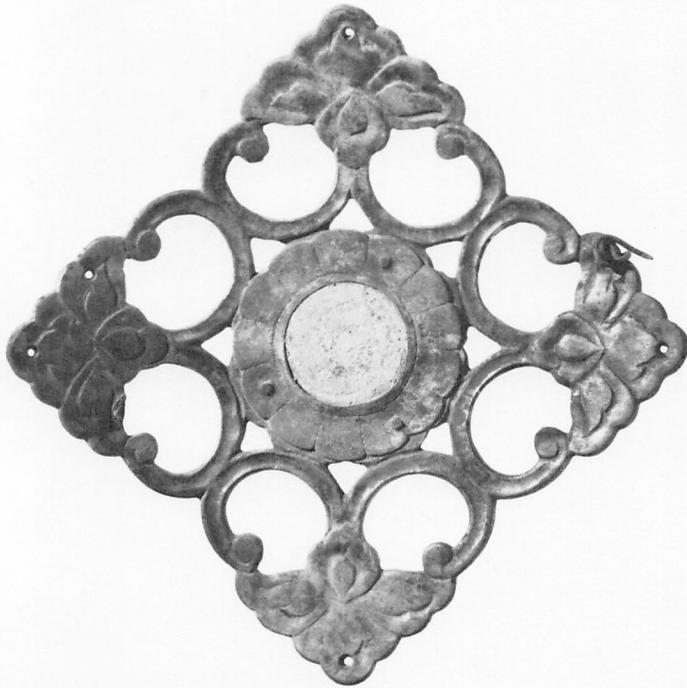


7

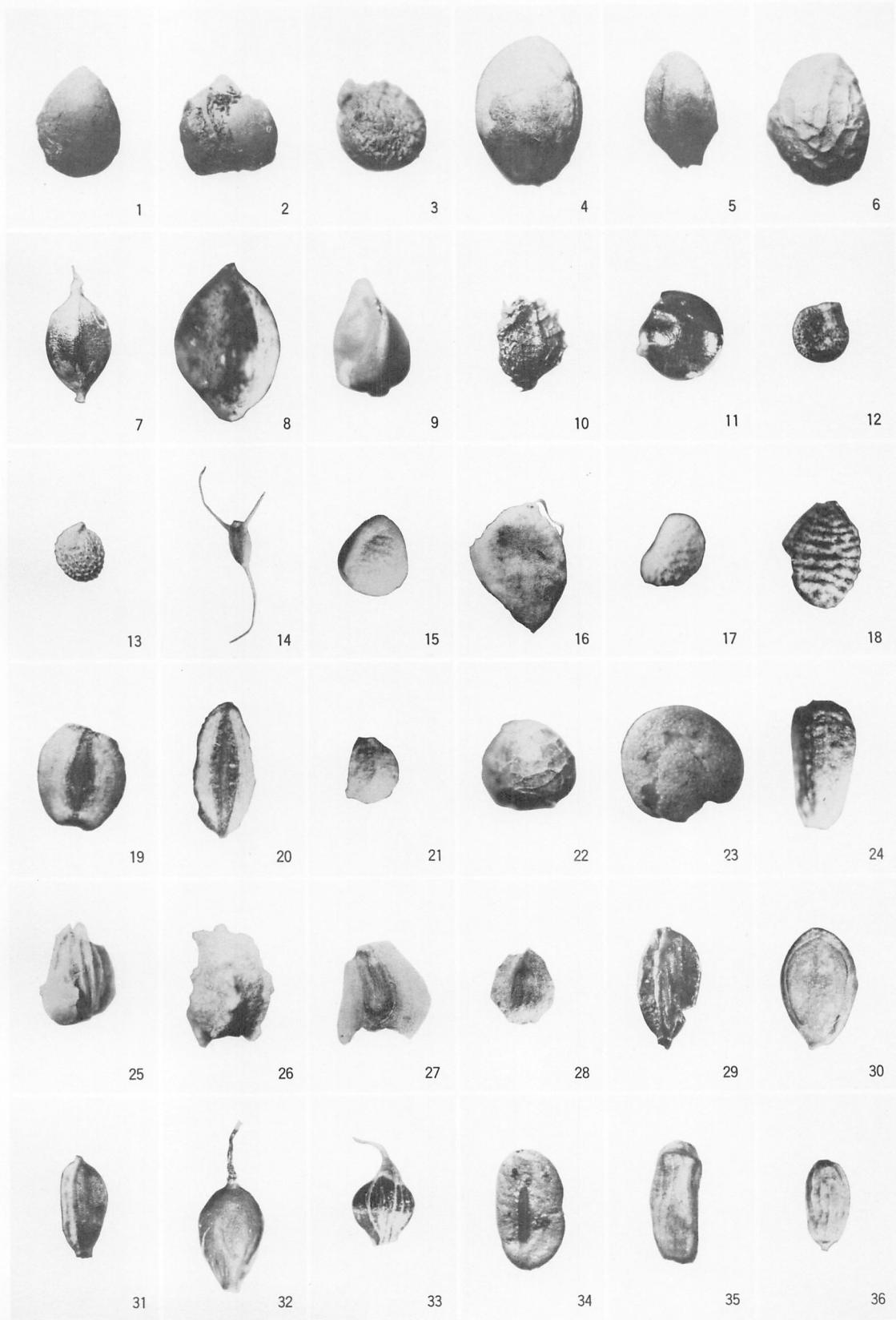


|

1



天蓋瓔珞

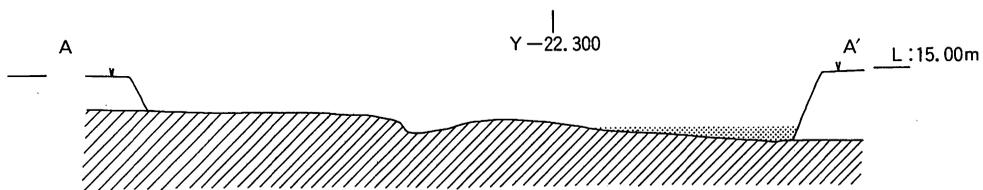
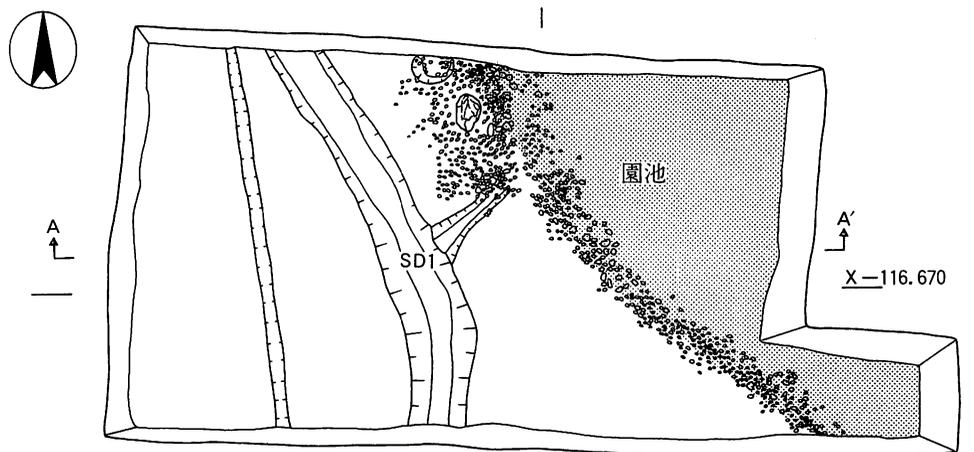


植物遺体

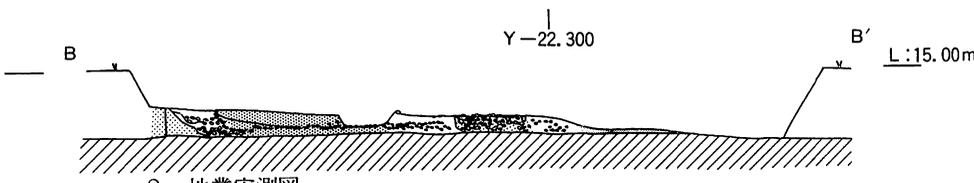
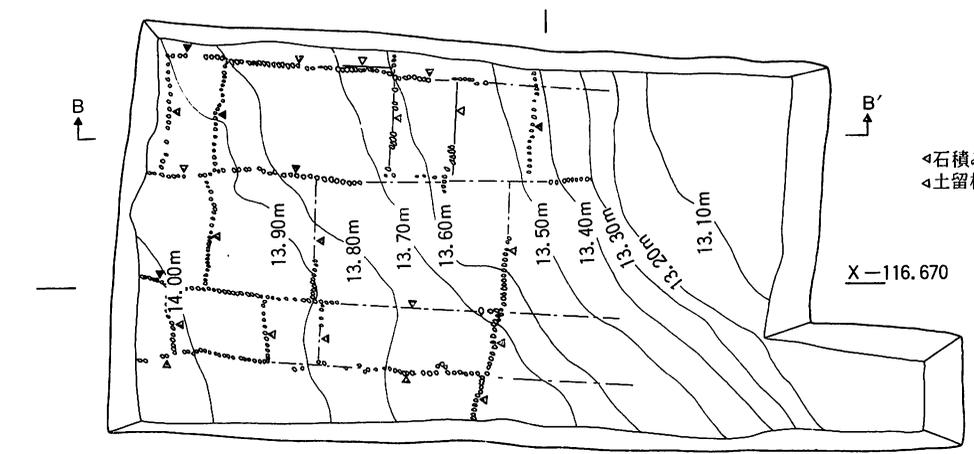


調査位置図

1 : 5,000

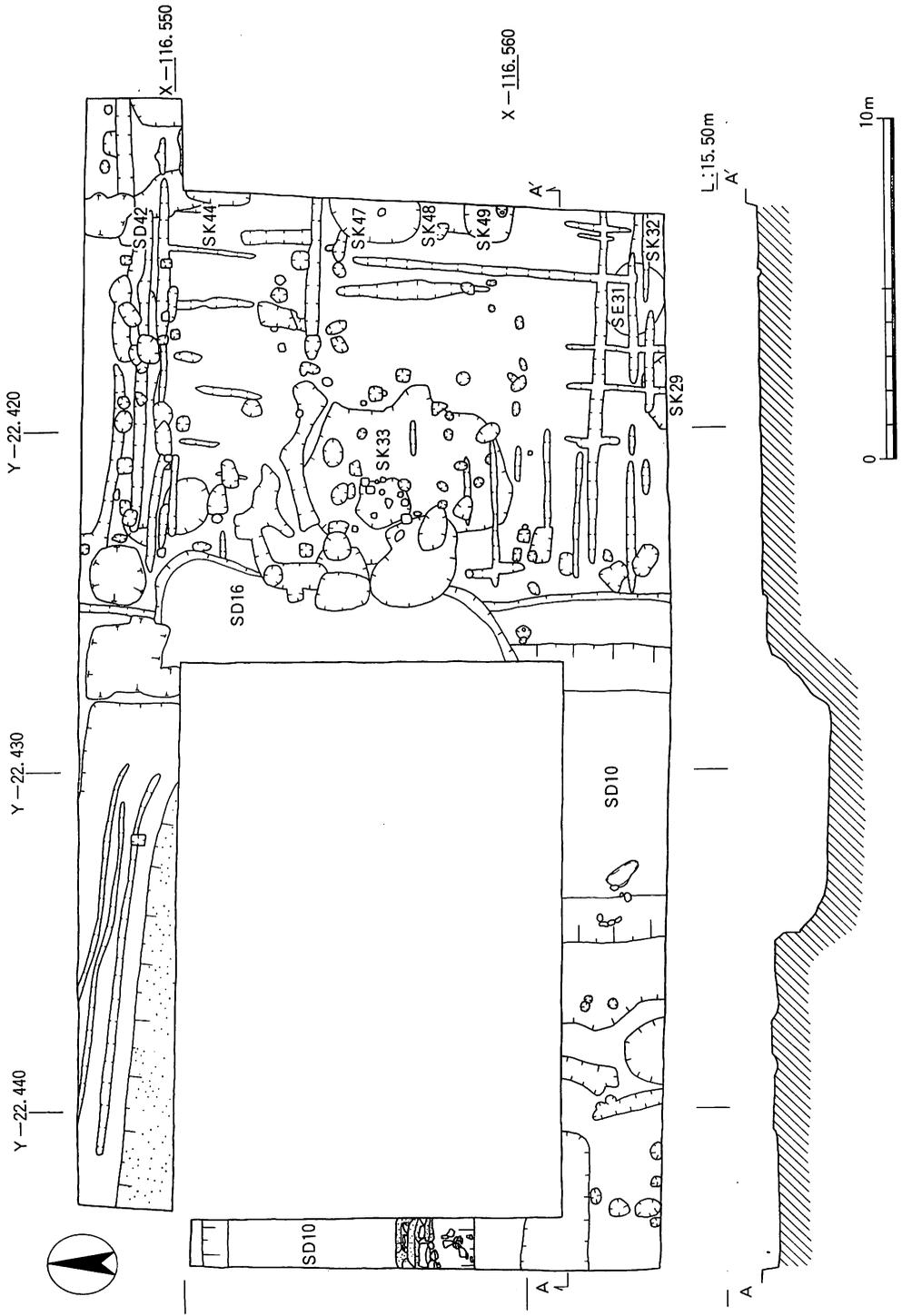


1 園池実測図

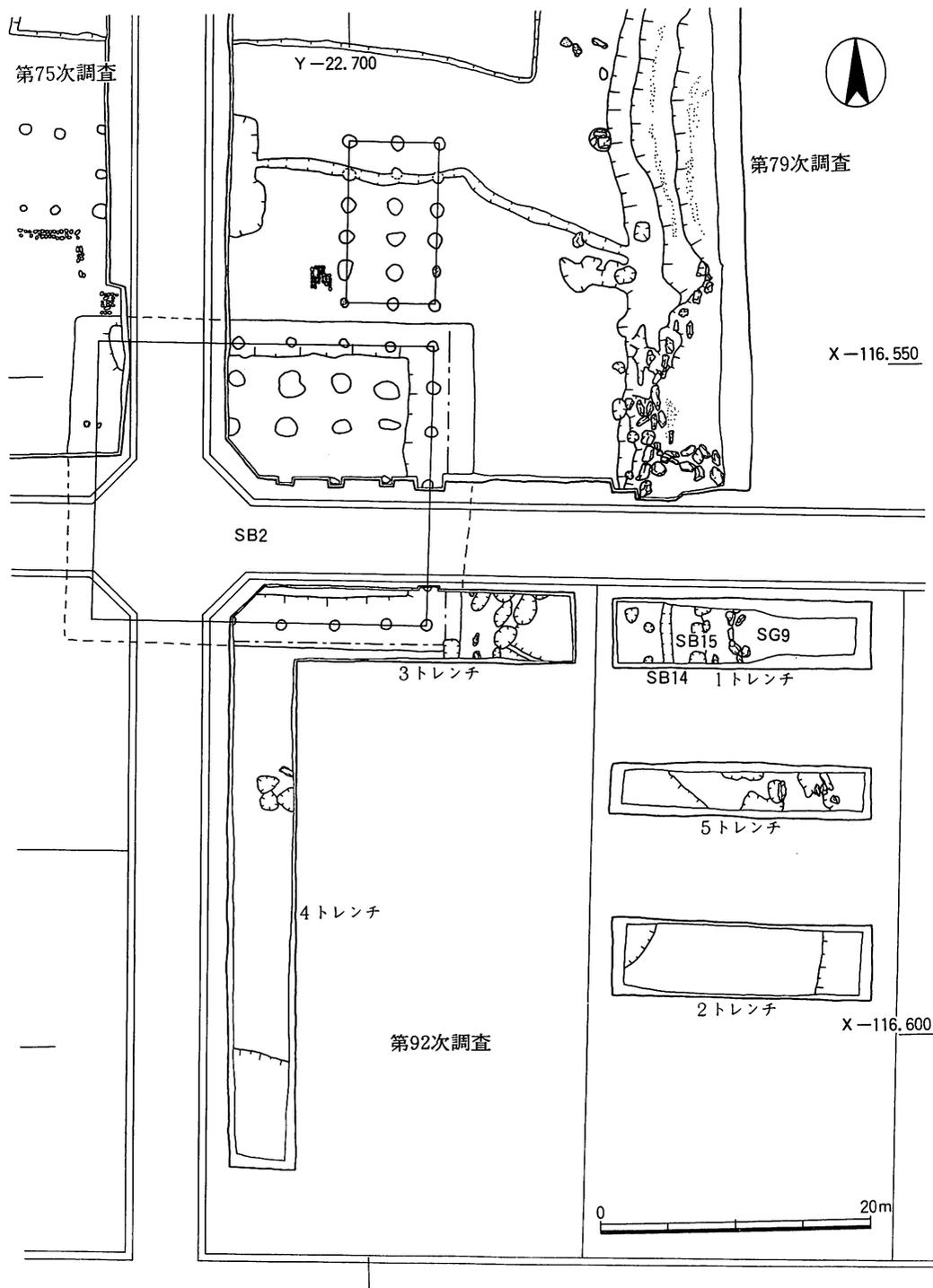


2 地業実測図

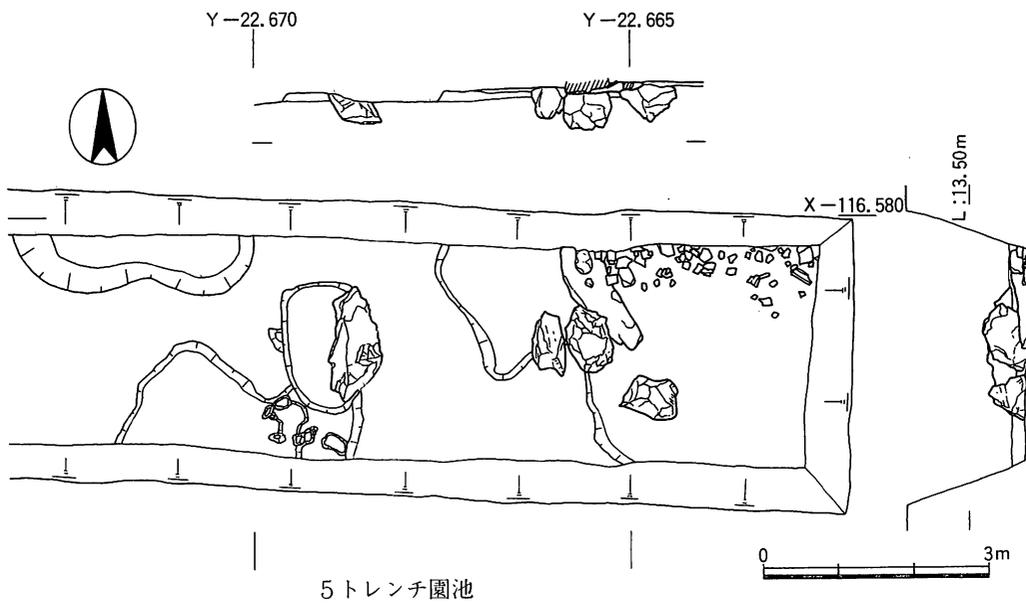
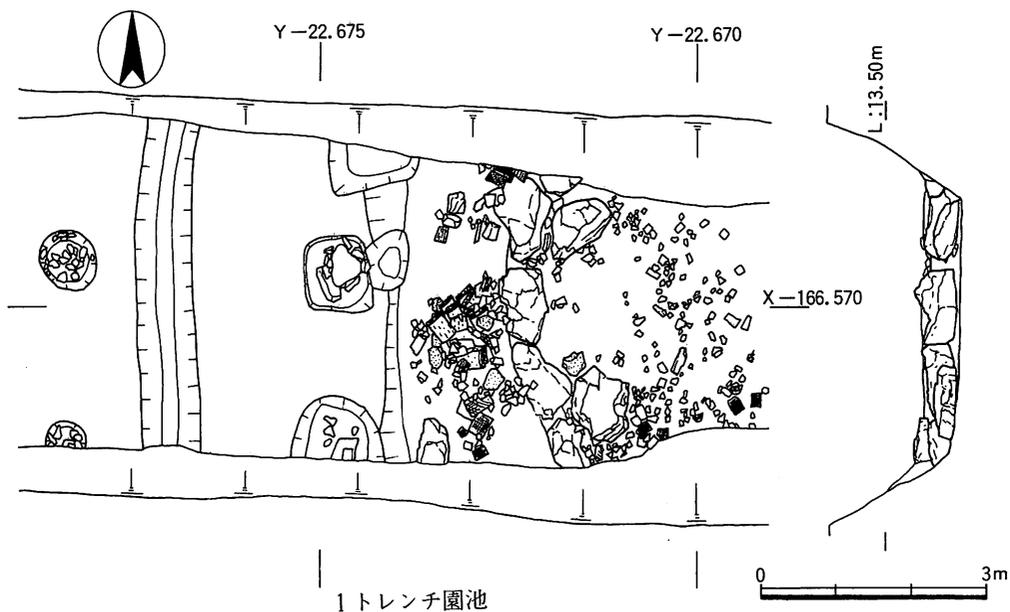
遺構実測図



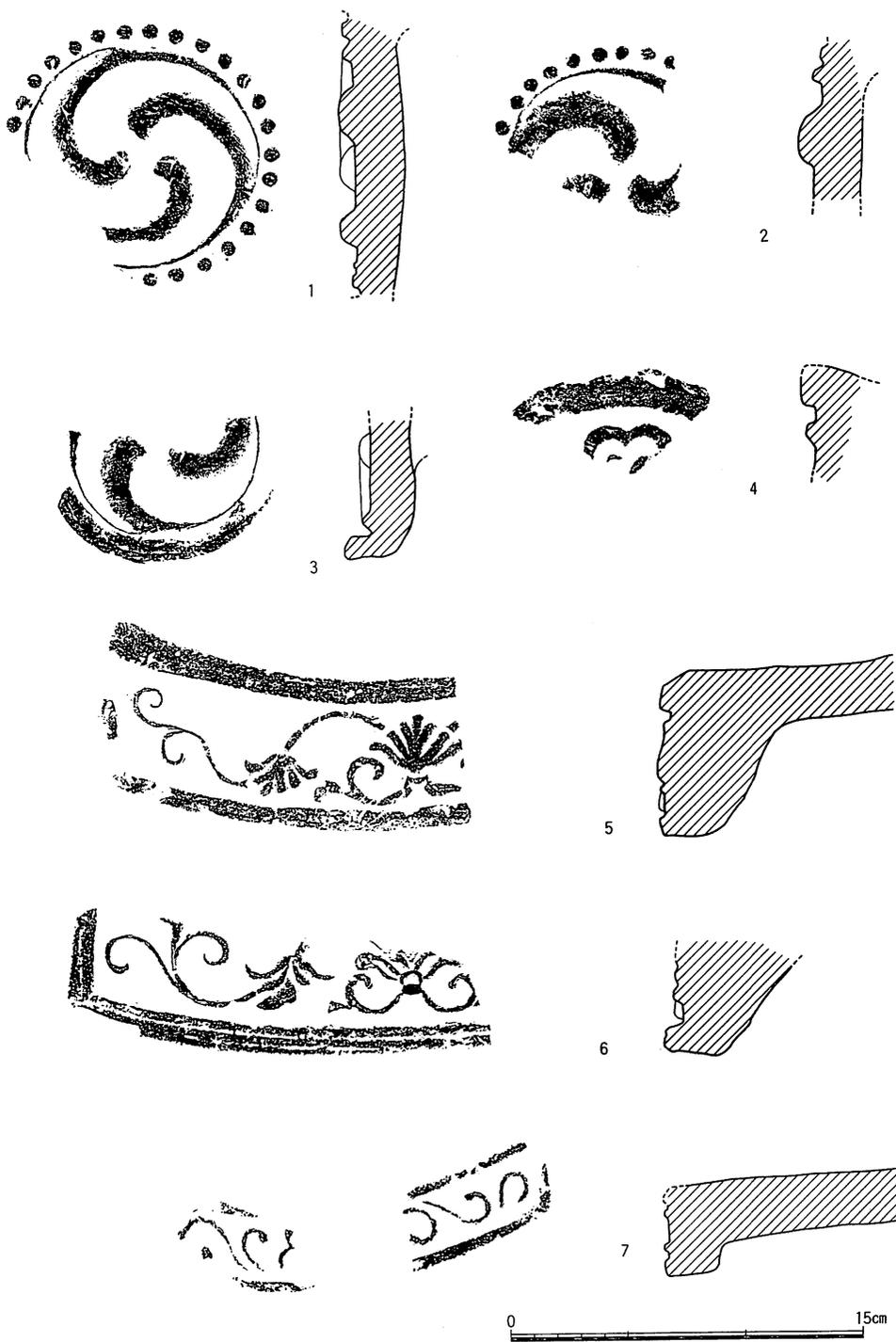
遺構実測図



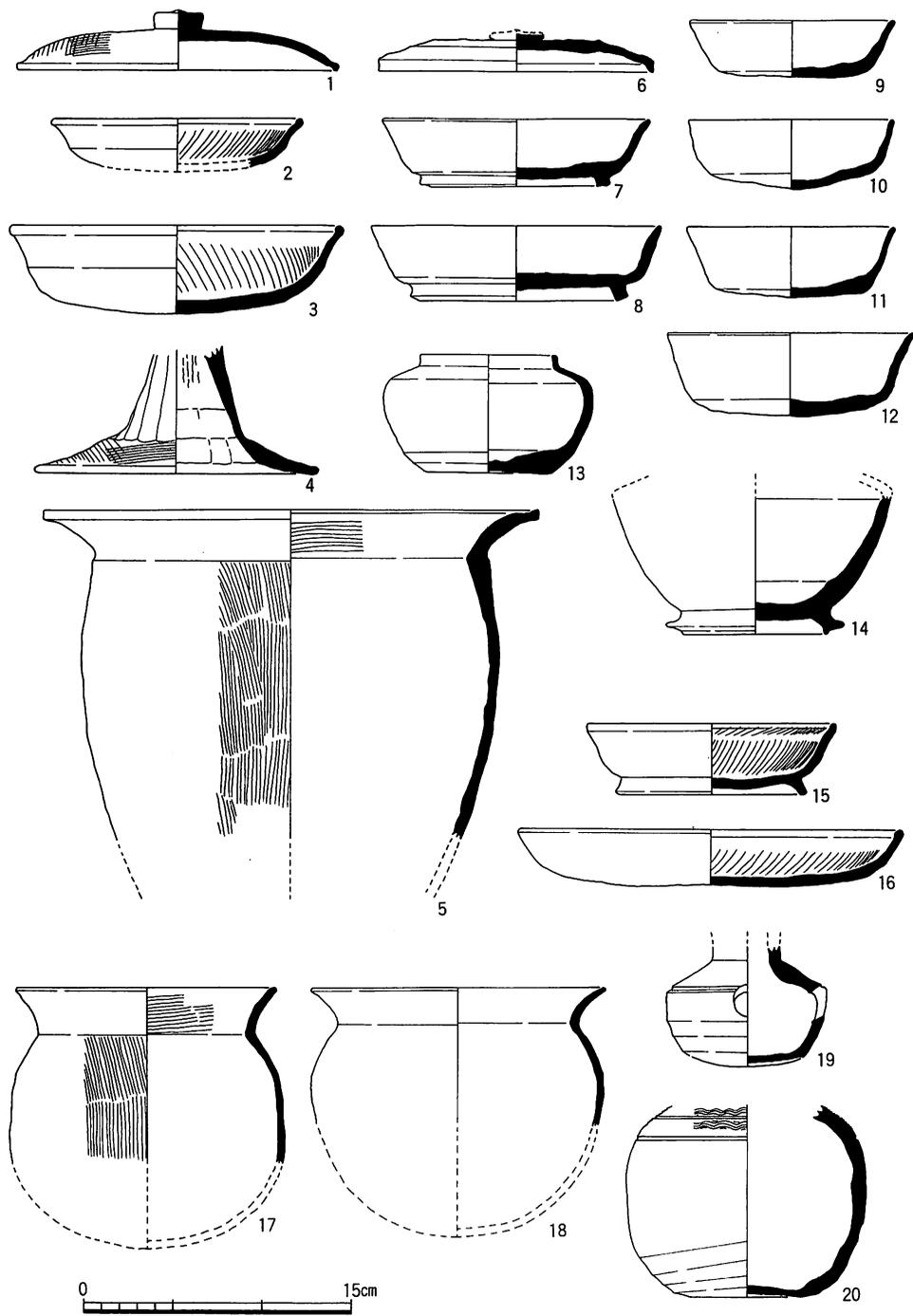
調査区配置図



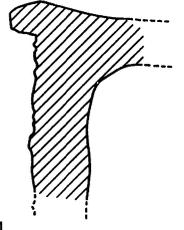
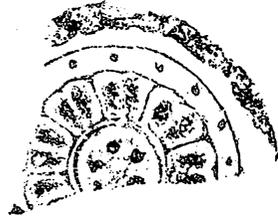
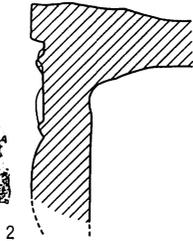
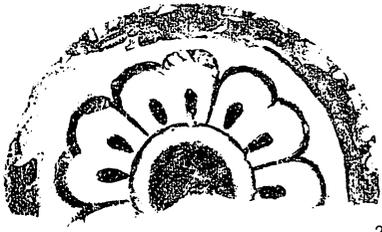
1トレンチ・5トレンチ園池実測図



軒瓦拓影・実測図

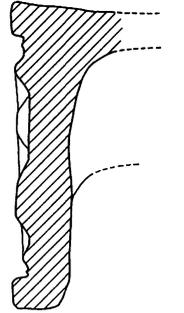
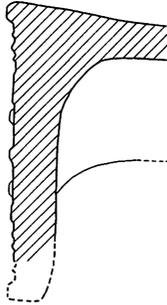
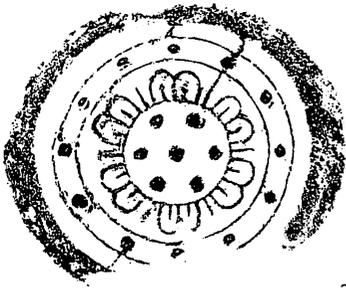


S X 6 (1~14), 第5層(15~20)出土土器実測図



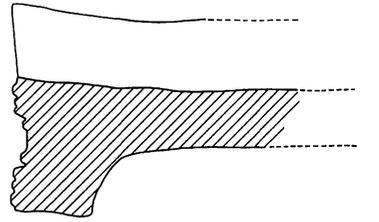
2

4

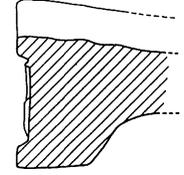
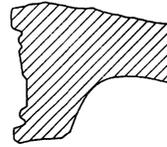


3

1

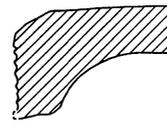


7



8

5



6

9



鳥羽離宮跡発掘調査概報

昭和58年度

発行日 昭和59年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社